



HOKKAIDO UNIVERSITY

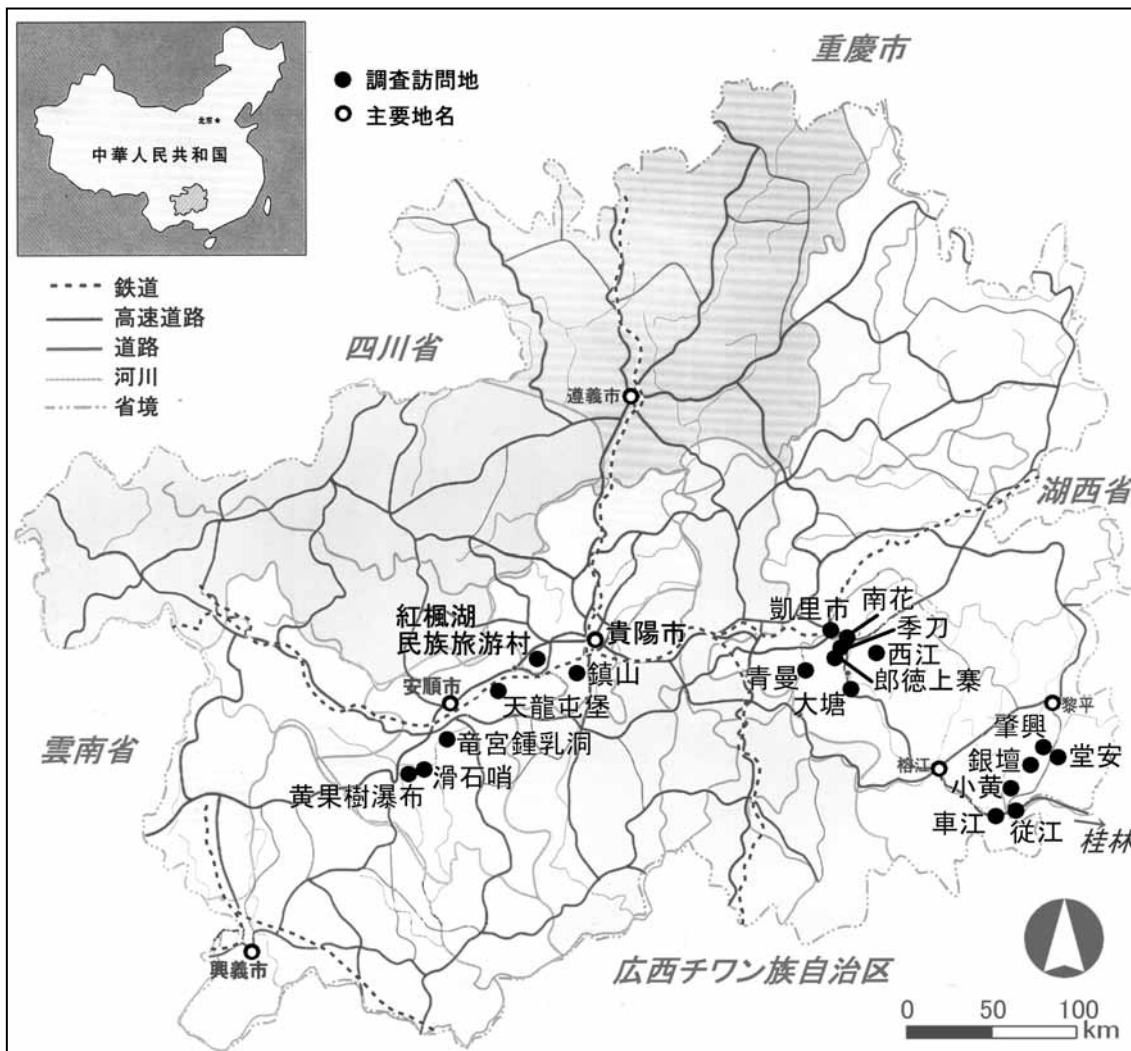
Title	1. 中国・貴州省編
Relation	コミュニティ・ベースド・ツーリズム事例研究 ～観光とコミュニティの幸せな関係性の構築に向けて～ = Case Studies of Community-Based Tourism : Towards a Sustainable Happy Relationship between Tourism and Community
Citation	CATS 叢書, 3, 1-54
Issue Date	2010-01-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42683
Rights	© 2010 北海道大学観光学高等研究センター、財団法人日本交通公社
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATSLibrary03_1-54.pdf



1. 中国・貴州省編

(1) 中国・貴州省 調査研究対象地の概要

1) 貴州省の位置と調査訪問地



ミャオ族の村で多く見られる風雨橋 (南花村)



トン族の村で多く見られる鼓楼 (銀壇村)

2) 貴州省の概要

項目	内容	備考
省都	貴陽市	
面積	17.6万 km ²	日本の半分弱の大きさ
地勢	雲貴高原の東北部に位置し海拔は約1,000m。省内を縦横に山地が走り、19の盆地が形成されている。森林面積が約14%を占める。	
気候	亜熱帯湿潤モンスーン気候で、冬の寒さも夏の暑さも厳しくない、穏やかな気候。貴陽市の年間降水量は1,016mm、平均気温は14.9度。	
人口	3,955万人	2006年末
人口密度	224人/km ²	2006年末
主要産業	農業では水稲、アブラナ、とうもろこしなどがさかん。工業は豊かな鉱物資源の開発を中心としている。水銀、リン、アルミの埋蔵量は全国トップクラス。	
GDP	2,282億元（約3.4兆円）	全国26/32位
1人当たりGDP	5,787元（約87,000円）	全国最下位
実質GDP成長率	11.6%	2006年
都市居住者 可処分所得	9,116元/年（約14万円/年）	2006年
農村居住者純収入	1,985元/年（約3万円/年）	2006年
固定資産投資	1,198億元（約1.8兆円）	2006年
社会消費品 小売総額	690億元（約1.0兆円）	2006年
対外貿易 輸出	10.3億米ドル（約1,200億円）	2006年
輸入	5.7億米ドル（約660億円）	2006年
外資直接投資	0.9億米ドル（約100億円）	2006年 実行ベース

資料出所：「貴州統計年鑑」等

3) 貴州省の民族観光の概要

<貴州省の民族観光の状況>

- ・ 中国・貴州省では1986年から、少数民族の村落などコミュニティ・レベルでの観光振興が進められている。
- ・ 貴州省の少数民族観光には多様な形態があり、さまざまな少数民族の衣装、歌、舞踊、建築などを紹介し、イベント、アトラクションなども開催するテーマパーク（紅楓湖民族旅游村）、村全体を博物館とするエコミュージアムである生態博物館、村民挙げて旅行者を歓迎する体制を築いている民族観光村などが、それぞれの方法で観光客を集めている。
- ・ 歌、舞踊、民族衣装、宗教儀礼などの民族文化は、伝統的な形式をそのまま伝えるだけではなく、同民族でも省内他地域のものも利用したり、宗教色を薄めたり、伝統的なタブーを破ったり、あるいはより漢民族から遠い要素を選択するなどして、観光客向けにアレンジされたものとなっている。

<民族文化の保護と観光開発の意義>

- ・ このように民族文化が観光客向けにアレンジされることによって、文化の「真正性」が失われるという批判もある。しかし、貴州省をはじめとする中国全土の農村部は、急速な近代化や漢文化との同化といった大きな流れの真ただ中にあり、観光地化とは関係なく、各地の民族文化が失われつつある状況にあった。
- ・ 貴州省では、むしろ観光開放が、民族文化・伝統の継承のきっかけとなっており、さらに一部では民族文化の発展とも言える状況が現れつつある。

<民族観光振興に関して指導的役割をしたキーパーソン>

- ・ 貴州省の少数民族観光振興に指導的な役割を果たしたのが、貴州省文化庁文物処処長・呉正光氏と貴州省黔东南自治州副州長の呉徳海氏という少数民族出身の政府幹部である。
- ・ 呉正光氏は、文化財保護の立場の役職にいて、早い時期から民族文化の消滅の危機を強く感じていたが、その危機を回避させる方法として、積極的に観光開放を行い、民族間の相互理解を促し、民族文化の地位向上を図ることが重要と考えた。その手段として、民族博物館を建設するだけでなく、民族文化が豊かな村を指定し、村まるごと「野外博物館」とする構想を打ち出して実現していった。また、北京、上海等の大都市で宣伝活動を実施することにより、少数民族文化のイメージ向上を図った。
- ・ 呉徳海氏は、州政府の観光事業を担当し、州内に観光振興の重点モデルとなる7つの村を「民族風情旅游点」として設定した。そして、村人たちに対し、少数民族の

文化普及と経済発展のためには観光開放が重要であることを積極的に説明した。

<民族観光の成功例>

- ・ この両者の指導により、少数民族観光で大きな成功を果たしたのが貴州省東南部の山間に位置するミャオ族の村・郎徳上寨であり、人口 700 人あまりの小さな村に年間数万人の観光客を集めるに至っている。観光開発は、村民の収入を倍増させるなど経済的な効果をもたらしただけでなく、文化大革命等により途絶えようとしていた伝統行事や、銅鼓舞（ドラを叩きながら踊る舞）・蘆笙舞（芦で作られた蘆笙という楽器を吹きながら踊る舞）といった民俗芸能が、年配者から若者に伝えられるきっかけとなり、民族文化の維持に大きく貢献した。
- ・ 郎徳上寨の成功により、追隨して観光開放を進める村や地域が増えるとともに、貴州省全体としても民族観光の気運が高まって来た。それにより、民族文化を学ぶ若者が増えるとともに、村や地域の間で競って技を切磋琢磨するようになった。また、特徴的なものについては他地域のものでも積極的に学び、アレンジして自分たちの村に導入するなど、新たな民族文化の創造、発展の例も見られるようになった。
- ・ その一例が「反排木鼓舞」と呼ばれるミャオ族の舞踊である。反排村出身の男性が伝統的な村の舞踏をアレンジして躍動感溢れる踊りを創造したもので、国内外に高く評価されるようになり、貴州省の民族文化をアピールする代表的舞踏の一つとなっている。



民族観光の成功地・郎徳上寨

(2) 中国・貴州省 現地視察調査の日程

調査の期間：2006年8月14日～23日

参加者：北海道大学観光学高等研究センター

石森

京都嵯峨芸術大学芸術学部観光デザイン科（当時）山村

財団法人日本交通公社

小林、黒須、緒川

現地旅行社ガイド・通訳：貴州天馬国際旅行社 彭 旭 副総経理（8月14～15日）

姚 沐 日本中心経理（8月16～23日）

■旅程表

日付	旅程
14日 (月)	成田空港→広州市→貴陽市
15日 (火)	貴陽市→龍宮（鍾乳洞）→黄果樹瀑布（アジア最大の滝）→石頭寨滑石峭（ブイ族石造家屋の村）→天龍屯堡古鎮（伝統劇団でも有名な老漢族の村/インタビュー）→貴陽市
16日 (水)	貴陽市→紅楓湖民族旅游村（少数民族文化のテーマパーク）→鎮山村（生態博物館指定のブイ族の村/インタビュー）→貴陽市（元貴州省文化庁文物処処長インタビュー）
17日 (木)	貴陽市→青曼村（ミャオ族の民族観光の村/インタビュー）→凱里市（州民族博物館）→凱里市内（元黔东南苗族侗族自治州副州長インタビュー）
18日 (金)	凱里市→南花村（後発のミャオ族の民族観光の村）→李刀村（観光開放間もないミャオ族の民族観光の村/インタビュー）→郎徳上寨村（貴州省少数民族観光の発祥地/元共産党書記インタビュー）→雷山県城
19日 (土)	雷山県城→西江鎮（千戸以上のミャオ族集落）→雷山県城
20日 (日)	雷山県城→大塘村（短裾ミャオ族・水上高床式倉庫の村）→車江村（巨大な鼓楼があるトン族の村）→銀潭村（山間のトン族の村）→従江県城
21日 (月)	従江県城→小黄村（歌で有名なトン族の山間の村）→堂安村（生態博物館指定のトン族の山間の村）→肇興村（トン族観光の中心的村/インタビュー）
22日 (火)	肇興村→桂林市
23日 (水)	桂林市→広州市（空港内にて現地研究会実施）
24日 (木)	広州市→成田空港 ※帰路の航空機整備不良のため予定より帰国が1日延期

(3) 中国・貴州省調査 研究会

1) 現地研究会

日時：2006年8月23日水曜日 12:00～13:50

場所：広州空港内レストラン

出席者：北海道大学観光学高等研究センター長	石森 秀三 教授
京都嵯峨芸術大学芸術学部観光デザイン科	山村 高淑 助教授
財団法人日本交通公社	小林 英俊 理事
	黒須 宏志 主任研究員
	緒川 弘孝 客員研究員

○視察調査のポイント

黒須：長期間の旅でしたので、日程表を見ながら、主なポイントをまとめてみます。

最初は黄果樹瀑布に行きました。その後、訪問先としては最初の民族村、石頭寨（滑石哨）に行きました。プイ族の石屋根の村です。

同じ日に天龍屯堡古鎮という老漢族の村に行きました。ここは、村から出たビジネスマンが、故郷に錦を飾るといった形で、2001年から石畳や川などが綺麗に整備されていた場所でした。ここでは、村のコミュニティと村の旅游公司の間を繋ぐ、旅游協会の役割について非常に興味深い話を聞くことができました。

次の日、鎮山というプイ族の生態博物館の村に行きましたが、生態博物館ということでの対応や整備は見られませんでした。村で入場料を取っていましたが、それと生態博物館の関係はありませんでした。湖畔にある湖水浴のリゾート地的な場所で、飲食関係の建物の開発なども、わりに無規則に行われて、散漫な感じがした場所でした。

紅楓湖の民族村は、行政の建設局が中心になって、もともとダム湖があったところをレジャー開発したものです。ダム湖の周りに別荘地があって、名前が知られてきたので、それに乗じて整備をしたという経緯で、建設局としても現金収入が得られるということで整備されている場所です。ここではいろいろな民族が働いていましたが、建築などはほとんど鉄筋コンクリートで、ホンモノではない典型的な例でした。



プイ族の村・石頭寨（滑石哨）

次の日は、ミャオ族のエリアに入りました。そして青曼村で初めてミャオ族の歌と踊りの歓迎を受けました。ここでは、村の共産党書記に案内してもらい、話を聞くことができました。村では人民公社時代からの、“工分”の仕組みを応用した利益の配分システムがあり、それでうまくいっているということでした。また、本来、春耕の後に蘆笙を吹くと不作になるとされ、タブーとされてきたのですが、党書記自らが指示して、年中、吹くことができるようにしたということでした。



紅楓湖民族旅游村

日が変わりまして、WTO（世界観光機関）も援助をした南花村ですが、やや綺麗に整備をされすぎているという感じがありました。まとまった話を聞くことができませんでした。村としてショーを行うなどして、客が集まっているところでした。

季刀村は、非常に印象深いところでした。ミャオ族の観光化される前の純粋な形でのホスピタリティを見ることができて、すれ違う村人がみんな挨拶をしてくれたという印象が残った村でした。ここでは、村の長老と観光のプロモーターをしている人の話を聞くことができたわけですが、同時に巴拉河流域の広域圏で観光のプロモーションを行っているリーダーが彼であるということがわかりました。郎徳上寨に比べると後発であるわけですが、外国人など、彼らの文化に対して理解を示してくれるお客さんをもっと呼びたいということです。WTOが調査を行ったときに、他の村と差別化すべきというアドバイスを受けて、そういうことを考えたということでした。

郎徳上寨では、事前に物売りの問題などを聞いていたのですが、実際に行ってみると、佇まいの保存がよくなされていて、物売りにもしつこく付きまとわれることもなく、逆に村の党書記の陳正涛さんや鬼師（祈祷師、シャーマン）の陳玉輝さんの息子

さんなどの歓待を受けることができ、詳しい話も聞くことができました。

翌日は、西江というミャオ族の千戸集落に行きました。まとまった話は聞けませんが、観光客が数多く集まる古典的な観光地になっていました。中心街に沿って観光客目当ての店やゲストハウスが整備されていました。西江は、道の行き止まりに位置していますが、規模が大きな村ということもあって、外国人の



ショーを行う郎徳上寨村の広場

観光客も多く来ているようでした。

翌日、民族衣装がミニスカートの村・大塘を経て、トン族のエリアに入りました。車江というトン族の村としては最大規模のところでしたが、村の外側に鼓楼（時を告げるための太鼓を吊るした木造建築で集会場でもある各村のシンボリック建物）がありまして、村と一体感がまったくないところでした。コミュニティと一体的な観光が行われている場所ではないという印象でした。



肇興村の家並み

銀潭村は、山の奥深くにあって外からまったく見えない窪地のようなところに鼓楼を二つ持った集落でして、非常に景観的にも美しく、印象が深かったところです。ここでは、村全体の入村料を取っていました。子供たちからモノをねだられたり、写真を撮っていると撮影料を求められたりと、観光ずれしている面もありました。

次の日に小黄村に行きました。小黄村は、次に行く堂安村と似ているのですが、肇興が観光センターになっている半面、小黄村、堂安村は山の上の方であって開発は手付かずの印象がありました。

翌日見た堂安村は、生態博物館となっていますが、鎮山村と同じように、生態博物館として具体的に何かをやっている印象はありませんでした。入村料は取っていませんでした。

最後に肇興ですが、周辺地域のセンターとして、レベルの高い宿泊施設も近年整備されています。しかし、それは貴陽の漢族の不動産会社が投資をしたものです。村の重要なアトラクションである歌と踊りのショーについても、もともと村がやっていたものを、その不動産の会社がやっています。鎮（中国の行政単位。省>州>県>鎮または郷>村というような関係がある）を形成する3つの村が県と契約し、県が仕切る形でその不動産の会社が動いているということがわかったものです。旅行の全体の流れは、こういったものでした。

○五感を通して幸せを感じる観光の時代へ

小林：貴州の後に最後に桂林に行ったのは、比較という点でよかったかもしれない。

山村：貴州の良さが引き立ちました。

小林：桂林と言えば、日本人の旅行先として、一時、北京以上に旅行者が行っていたところなんですね。中国が好きというより、あの景色の魅力に魅かれて行く人が多かったのではないのでしょうか。

黒須：ある時期から中国観光は、歴史系から自然系の資源にシフトしたということも言われています。

石森：中国観光の変遷みたいなものがわかると面白いのですが、万里の長城などの名所見物型から、五感を通して幸せを感じる観光の時代になるでしょうね。そういう意味でまさに貴州省は良いですね。桂林などは、来てしまえば、こんなものかなとなる。日本人にとっての中国観光のステージというのがあるんじゃないですかね。



桂林の夜店

小林：日本人の中国観光は、最初は、中国そのもの、あるいは中国共産主義に憧れる人が来ることが非常に多かった。それと、もう一つは、昔住んでいたとか、有名なところを一回見ておこうという旅が主流でしたね。

石森：中国における貴州省の位置づけは、空間的には桂林に近い。だが時間軸で見ると、桂林は最初に火が点いて、貴州省は今、ようやく観光客が来始めた。隣接する雲南省は先行しているが。そういう空間的な差異性と、時間軸の中でのスポットライトの当たり方という点に着目して整理できると面白いと思う。戦後における日本人にとっての中国観光の流れを整理した上で、今なぜ貴州省なのか、ということもわかるとよいですね。

小林：観光地としての雲南が日本人に知られるようになったのは、最初は石林ですね。その後、大理、麗江が知られるようになって、少数民族文化に触れる旅先としてシフトしてきた。四川の場合は、成都と峨眉山が中心だったのが、九寨溝が知られるようになってから、少数民族文化に注目が集まる方向に一気に変わったんです。自然景観と少数民族文化の双方を資源とする観光形態が現れてきたわけです。ですから、石森先生がおっしゃるように、今後貴州は、みんなの思っている中国西南のイメージとピッタリ合う目的地になっていくと思います。タイミングが早すぎたら、難しかったと思います。デビューとして一番良いタイミングだったのかもしれない。

山村：雲南省の麗江は、まさに自然景観と少数民族文化の双方が融合して観光資源となっている好例ですね。また同じく雲南の石林なのですが、最近では、石林だけ見に行くというより、石林付近に居住しているサニ族の踊りを見るのがセットになっています。やはりただ単に水墨画的風景を見るというだけではなく、その地の民族の文化に触れたいという欲求が、観光客に生まれて来ているのではないかと思います。

小林：それは面白いですね。桂林でも周辺の少数民族を巡るコースが開発されているとのことでしたね。

黒須：確かに観光地の発展プロセスに着目することは重要ですね。観光地の発展プロセ

スには、最初少数のコアな連中がやってくる、観光客数が増えてくると、その中でいろんな形態のリピーターが増えてきて、地域の側もオプションを増やしていく、という部分がある。そのあたりに着目して、事例を集められるといいですね。

○観光地の変遷とライフサイクル

石森：黒須さんがおっしゃったように、重要な視点の一つは、観光地のライフサイクルですね。明らかに盛衰がある。今回見た事例も、ここはライフステージの始まりですとか、ここは落ちかかっていますとか、ある程度、観光地のライフステージという中で位置づけることができるのではないかな。もちろん厳密にはちゃんとした基準を決めないといけないが、今回は、予備的・仮説的な調査なので、まずは概観から始めたいですね。

小林：今回、面白かったのは、観光開発を始めてからの年月の違いで、いろいろなパターンが見られたことですね。

黒須：同時に感じたのは、1985年あたりから観光開発を始めている村が多かった点です。西江村も1985年あたりから始まり、1992年ぐらいから本格化したということでしたが、多分、他の村もほぼ共通したように思います。ただ、いずれの村も同じ頃から始まっているのですが、発達プロセスと言うか、内容がどうやら違うようです。そこら辺をどう整理したらよいのか。

小林：そうですね。面白いのは、同じ地域の同じ少数民族の村が、オープンの時期によって、どう変わっているかという点ですね。

石森：雲南省における少数民族と比べても、貴州省の場合は、村単位でしっかりしているという感じを受けましたね。世界的に見ても、これだけ村を挙げて観光に取り組むというのは、意外と少ないのではないのでしょうか。

○確固たる本業としての農業生産とプラスαの収入としての観光

小林：石森先生の観光ライフスタイルの話聞いていて触発されたのですが、郎徳上寨などは観光開発の開始から20年経っても、いろいろあるにしても、思ったほど“観光ずれ”していない。例えば、正業に重点を置いていて、それを主とすることによって、“観光ずれ”を最小限に抑えることができるという仮説が成り立つのではないかな…

山村：おっしゃる通りだと思います。観光が主幹産業になってはいけないという逆説が成り立つのではないかな。特に村レベルでは。

小林：今回、特にそう感じた。観光に走ってしまうと、一気に行くとところまで行ってしまふ。今回も観光に走っている村で、売り物の値段を誤魔化した売店のおばさんなどを見ると、放っておくと怖いなと思った。

山村：今回見たような農村部では、まずは農業の生産基盤がしっかりしている上で、プラスαの収入として観光を位置づけないといけないと思うんです。今回キーワードとして、「富の再配分」ということがあったと思います。「うちの村は観光立村で行きます」と言った場合、収入を観光のみに頼ってしまうと、それが非常に難しくなるのではないかと感じました。基盤としての農業生産があって、その上での観光収入をうまく分配するというシステムでないと、うまく行かないのではないかと感じました。

小林：観光で行きたかったら“観光立村”と言うな、ということですね。

山村：逆説です。

石森：肇興で印象的だったのは、夜中まで仕事をしていた縫製の工房です。朝一番でもやっていた。ああいう観光以外の産業のベースがないといけない。全てが観光に傾いてしまうと危ないと思う。

○村における聖・俗2人のリーダー

小林：少数民族の特徴みたいなものでしょうか。今でも、歌や踊りを村人みんなと一緒にできるという“つながり”がありましたね。日本で言えば「結（集落等の住民が共同作業により相互に助け合うしくみ）」のような感じですね。貴州は、まだそういうものがうまく残っている。そういうところでないと集落観光の開発は難しいのかなと感じました。

山村：もう一つ重要な点は、村落の中に、対外的な交渉をする共産党の“書記”のような方と、内部の住民を説き伏せる“鬼師”という職業の方というふたつのまとめ役・相談役がいました。これは外と内をうまく使い分けるしくみとも言える。日本だと1人のリーダーでそれをやろうとするのですが、貴州の例を見ていると、それはやはり無理ではないかと思いました。“書記”と“鬼師”というように、両方の車輪でうまくやらないと、土着の信仰や風習に根差した住民の意見をうまく調整できない。書記には、政治的な合理性というものが常に頭にありますよね。いわゆるタテマエです。観光開発というときには、対外的に交渉しなければならない。そういうときは共産党の“書記”が出ていくわけです。ただタテマエや理屈だけでは共同体は動かない。この理屈でわからないホンネの部分で“鬼師”のような土着の伝統的なリーダーが説き伏せていく。先ほど出てきた観光のライフサイクルによる分類とは別に、村の中の指示系統と



ショーを行う広場は農作業と共用（肇興村にて）

いうかリーダーの組み合わせ等によっても観光集落の分類ができるのではないかなと思います。

小林：論文などからは、二人の呉さんが地域を動かしたイメージが強かったが、実際に現場でお話を伺うと、書記の陳さんと鬼師の陳さん、二人の陳さんが想像していた以上に重要な役割を果たしていた。陳さんに力量がなかったら、あそこまで観光開発は出来なかったのではないかな。そうなってくると、日本で“鬼師”のような、精神的なリーダーの役割を果たせる人がいるのかどうか。あるとしたら、地元の学校の校長で地元のことを研究していて、かつ人望がある人、とか、郷土史家の人が、若干それに近い。日本の信仰というのは、もはや宗教ではなくなっているから、ある一定の役割を持っているのはそういう人だ。読み替えというのが必要になってくる。



郎徳上寨村遠景

○地元と結びついた投資家の登場

黒須：山村先生の視点の中で、重要な要素にジェネレーションというのがありますね。

山村：肇興の20人の舞踊団に地元出身の人が十数人で、それ以外の方は周辺の地域から集まってきている。そういう意味で、あそこが伝統音楽の集積地になる可能性を秘めていますね。しかも、村の子供たちがパフォーマンスを聞いているというのが、非常に効果的だと思いましたね。

石森：若い人はお金が伴わないとね。我々は伝統文化を大切にしながら、伝統文化を捨てちゃったわけだけれど、彼らが文化を引き継ぐにはお金が大事ですよ。

山村：それも貴陽の投資家の方が、肇興に投資しているんですよ。その人が文化的な理解のレベルが高かったことが幸いしました。

石森：大学教授だった人ですよ。

小林：一つは、地元出身者でそういうことを意識できて、ある程度外で成功した人の存在というのが大きいですね。天龍古鎮もそう。そういう人が機能している。日本だと、金を儲けたら、故郷を忘れようとする。それを、戻ってきて故郷の文化のために投資をするというのが日本と違うなと思いました。

石森：先々への視野ということ言うと、中国におけるアントレプレナー、起業家のことも考えておく必要がありますね。今回の事例でも何人かいましたね。郷鎮企業（県

や市のレベルより小さい行政単位である郷や鎮における中小企業) やその前段階の人民公社がやる場合と、個人の投資家、起業家がやる場合。起業家の場合は、どこか狙いをつけて投資をする。郷鎮企業の場合は、村を挙げてやるという形で違いがある。天龍古鎮は村を挙げてやりながらも、地元出身の起業家が投資をしているという面白い形でした。

小林：肇興に投資した貴陽の投資家が最近、天龍古鎮の近くに投資したというから、今後、その関係がどうなるかというのが面白いですね。

黒須：生態博物館の鎮山村は、これから香港の投資会社が開発しようとしていて、まさにこれから観光地のサイクルが始まろうとしていますね。

小林：どういう意図でやるかだ。少なくとも地元エリア出身の人は、多少は地元の文化的なことを考えるだろうが、金儲けとしてやるとしたら、どうなるのかですね。

黒須：これからもそういう村は出てくるでしょうね。

小林：あそこは、人工湖があって、観光客が泳ぎに来ていたでしょう？だから、リゾート的な開発をしているのかなと思うのですが、そこが心配な点です。ちゃんと文化を残して人を呼ぼうとしているのかなと。

山村：投資をしている人間が、あまり地元と関係ないとうまくいかないことが多いですよ。

黒須：肇興への投資家は、そういう点ではなかなか文化に対する理解の高い人物のようですね。



天龍屯堡古鎮のメインストリート



紅楓湖民族旅游村



鎮山布衣族生態博物館（鎮山村）

○儲けの手段ではないホスピタリティが資本

小林：最初に呉正光先生の話聞いたのが良かった。非常に理路整然と話してくれた。

石森：呉徳海先生の話も、文化の要素の説明が的確でした。家、服装、言葉、歌というように説明があつてね。ところで、家が煉瓦やコンクリートづくりになっていたところがありましたね。

小林：青曼村ですね。1軒だけでしたが。ルールを作る前に建てたものを戻せというのは、なかなか難しいんですね。後から表面に板を貼ったりしていましたが…

山村：あの貼り方は、ちょっといただけないですね。

黒須：意識を持って指導している人がいるかどうかですね。

小林：手法とセットで指導しないと…

石森：民族文化衰退の中での観光という話は、迫力があつたね。

黒須：呉正光さんの話の中で、郎徳上寨が観光客に対して村を開いてよかったことの一
番目に、「ミャオの文化には世界に誇れるものがある」ということを村人が理解し
てくれた、というのが印象的でしたね。

あそこがミャオ族の文化のセンターとして象徴的な存在になったということ
でしたね。

小林：それから、ミャオ族は、ホスピタリティの点でも感心しましたね。ニーハオと言っただけで、村まで連れて行かれましたからね(笑)。二人で河原のところにおいて、ミャオ族の人がいたから、「ニーハオ」と挨拶したんです。そしたら途端に来いと言われてね。で、一緒に階段をどんどんどんどん上がって行ってね。普通なら行かないですよ。で、行ってみたら、なんてことはない。お茶を一杯飲んだだけだった(笑)。二人でコップ一つしかなくてね。しかも、お茶というか白湯。でも、呼んでくれるわけ。ミャオのホスピタリティというのが、よくわかった。言葉も全然通じないんだけどね。農村観光と言っても、ベースになる気持ちを持っている人たちがやるのと、金儲けの



青曼村のコンクリート建造物



コンクリート造の家を木の板で隠す処理
(季刀村)

手段でやろうとするのとは全然違いますね。そういうベースがないところは根付かないですね。

黒須：逆にその気持ちが失われてしまうと、それはミャオの文化そのものが失われる瞬間かもしれませんね。先ほどの話ですが、農業を一つの柱にすることでそういう気持ちを守ることができるのではないかと、というのが一つの仮説になりますね。

小林：日本では考えられないね。外人が「ハロー」と言っても。

黒須：ミャオ族の特徴なのかもしれませんね。

○観光収入の公平な分配のしくみ

小林：トン族も、最初に行った銀潭村はよかった。村人に素朴なところが残っていて。でも、ショーの値段は高かった。急激にそういう経済的な意識が入ってきているのかも知れません。

山村：写真を撮ったら、おばちゃんからお金を求められたりしましたね。

緒川：渡したら、「もっとくれ」と言われました…

山村：小さな子供も「チップ、チップ」と言ってきたりして。お金によって心が荒んで行くサイクルに入っているというか…

黒須：なるほど、観光地のサイクルと言っても一つの次元ではなくて、いろいろな次元があるわけですね。

山村：あると思います。それが複合的に作用して、観光客に「ここはイヤだ」という感情が起こったりすることにもなるのだと思います。

小林：あそこの村は、もっと正しく発展して欲しいですね。

石森：伝統工芸もありますしね。

山村：写真を撮っていると、おばちゃんに「アンフェア」と言われ、お金を要求されましたね。

小林：入村料を取って、みんなに分配されていれば違うのしょうけれど。タイの首長族の村は、写真を撮っても嫌がらない。それは村に入るときに入村



銀潭村の家並み



堂安村を望む風景

料を取って、それがちゃんと分配されているからなんですね。モノを買ってくれと声をかけてくるけど（笑）。

山村：写真の撮り方でも解釈のされ方によって、どうしてあの人はお金をもらって、私はもらえないのか、あの人は美人だからもらえて、私はそうじゃないからもらえないのか、というような受け取り方をされてしまう。そうすると村の中でのいがみ合いが起こって来て、うまくいかなくなりますよね。

緒川：あそこの村では、一応、写真1点あたりの値段が書いてありましたね。盛装10元、民族衣装5元、平服2元というように。



銀潭村の観光料金徴収を示す看板

黒須：山村先生は、個別のビジネスが立ち上がってきて、モノを売ったりするよりも、収入源は一つにまとめておいて、それを分配するやりの方が良いと思いますか？

山村：その両方があっても良いと思います。

小林：両方ないと、努力しなくなりますからね。人は金が儲かるから努力する、という部分もありますから。

黒須：でも産業として捉えるなら、宿泊なり、病院なりという機能を全員で共有というわけにはいかないですよね？

山村：いわゆる社会主義がうまくいかない場合と、社会主義をちょっと修正したらうまくいく場合とがあるのだと思います。そのへんのうまい配分というのがあるのではないのでしょうか。まさにそこが、リーダーの考えるべきところだと思います。それから小林先生がおっしゃったように儲かる、という点も非常に重要で、良い工芸品が高く売れる、といったことは観光や文化の質を高めていくうえでも良いことだと思います。

小林：そうすると考えますからね。質を高めて利益を高くしようと。

○“開放型観光”が、文化を発展させる

小林：生態博物館というコンセプトはどうでしょう。フランスのエコミュージアムのように、住民みんなの意識が高いところだと実現できる。しかし現段階で村民に理解させることができるかどうか。ただ堂安村は、生態博物館の指定とは関係なしに良かった。あの村を上から見たときに、日本の斑鳩（法隆寺が建立され、聖徳太子以来の古い歴史を持つ奈良県の町）だと思った。三重塔が日本より高くなっているだけで、田んぼがあって、斑鳩の景色に似ていると思った。

山村：鼓楼の隣にみんなが使える泉があって、冷たくて気持ちよくて、お米を洗ってい

る人がいたりして。

小林：今も生きている、機能している村ですね。あのまま残っていけば生態博物館と言えると思います。

黒須：呉正光先生が、「生態を保護するというときに、自然と文化があって、自然はとにかくなるべくそのまま保護する。文化というのは生き物なのだから、“変わらずにいる”ということとはできない。逆に開放することによって発展して行くんだ」とおっしゃっていましたね。

山村：開放型保護と言っていましたね。

黒須：開放型保護のその先に発展がある。ナイーブなままでは、いずれ損なわれてしまう。開放する中でアイデンティティを確立して上のステージに行けるんだ、ということですね。

山村：肇興の歌などは、明らかに開放することによってレベルがはるかに上がっていますね。我々が「全部、地元の歌なんですか？」と聞いたときに、いや、地元の村だけではなく、トン族のいろんな集落から良いものを集めてきていると。それはそれで、すごく良いことですよね。

黒須：青曼村でも、お客さんを迎えるようになってから、ツバメの踊りなど、新しい歌を開発したと言っていましたね。

小林：そういう点では、今のところ観光の良い面が出ている気がしますね。

緒川：呉正光先生は、死んだ文化は保護しても仕方がないというようなことをおっしゃっていましたね。常に変わって行くべきだと。

小林：省の文化保護の最高責任者が、そういう進んだ考え方をしているんですよね。日本の文部科学省の人なら、そこまでなかなか言わない。

緒川：リアリズムですよ。ここまでは守る”というものがある。服装と環境と建築が守られれば、とりあえずは良いんだと。後は、しょうがないと。

山村：そこははっきりと言いつけていましたね。

○観光の裏に見え隠れする目的

黒須：いろいろなことの中に、中国の特殊事情が見え隠れするんですが、その一つの例だと思ったのが、肇興の文化的なプロパガンダです。人民公社みたいな組織があって、そういう土壌があるから村の統一が図れるのだという考え方もあると思うのですが、それ



堂安村の鼓楼と泉のほとり

については、我々としてはどう考えることができるのでしょうか？

山村：プロパガンダとあれだけ言い切っ
てしまっているところが、逆に気持ち
よいなと感じました。日本が観光立国
と称してやろうとしていることも、あ
る種のプロパガンダじゃないですか。
それなのに、そう言わずに綺麗ごとで
すまそうとしている。逆に今、肇興の
文化ステーションで働いている人に
プロパガンダ的な意図ってそんなに



西江千戸集落

強くないと思うんですよ。中央にとっては、少数民族地域が豊かになることで、共産党政権は民族差別していませんよ、という強力なアピールになるという政治的意図は当然ある。しかし結局のところ、中央と地方の双方に利益がありさえすれば、建前としては間違っていないと思う。中国人は、おそらくそういう建前をうまく使い分けているはず。地元もそこまで馬鹿ではない。したたかに中央とやりとりしているはず。逆にそこまでうまくできないと、そういう地域はダメになる。それが対外的なかけひきだと思います。

小林：今回の調査で注意が必要だと思ったのが、村では共産党の書物で観光の知識を得ていたとか、西江の碑文に観光開発が1982年からだとか、いろんな情報が錯綜している点です。人間の記憶は後からつくられるところもあるから、その点は気をつけないといけない。客観的に詰めていかないとわからない部分も多いですね。

石森：今回は10日間の調査ですからね。すべての面で完璧というのは難しいですね。

○コミュニティがまとまる適正な規模～100戸500人

小林：我々の研究の目的は、日本でどうしたらいいか、日本に還元できる知見を得ることにあるから、完璧ではないが、日本の参考になる報告をしなければならない。そういう点で、石森先生がおっしゃった「日本には農家観光はあるけど、農村観光はない」という話は、今回、ますます実感しました。日本では、個人レベルで観光産業をやっている、村単位、エリア単位には全然なっていない。郎徳上寨では、誰か特定の家が観光業をやっている、というのはない。その違いは、人民公社の経験が生き残っていることが活きているのだと思います。

山村：陳さんが観光開発の三つのポイントについて触れていらっしゃいました。すなわち、一つ目は再配分の仕組みの“工分”。二つ目が指示系統。お客さんが来たら放送で村民に呼びかけて一斉に集まるという仕組み。三つ目が仕事をしながら接客ができる、

農業が基本にあるということ。まさに、そのへんが、一つの結論なのかなという気がします。

話は飛ぶのですが、今回、気になった数字が二つあります。一つは“500 元”です。ショーを見せるのが 500 元、月給も 500 元。そのへんが一つのキーになるのかなと思います。もう一つは、村の単位ですが、だいたい 100 戸、500 人というのが、一つの指示系統がうまくいく規模かなと感じました。

小林：確かに西江のように千戸のでかい集落だと、まとまりもなく、旅行者としても面白くないですね。

山村：西江では、大きなゲストハウスをつくった主人が、ただそのでかさを自慢しているようなところがありましたしね。

小林：農村を見せるということを考えると、100 戸、500 人くらいの単位がいいかもしれないね。配分もうまくいくだろうし。西江だと、我々自身、どこを見たらいいのか、わからなかったですからね。最初は、千戸集まった様子を見せるというところから始まったと思うんですよ。そういう意味では、峠を越えて最初に見える場所から見ると、確かに絵になる。

山村：記憶が蘇ったんですが、私は 7 年前に確かに西江に行きました。凱里の旅行会社で近くのミャオの良い村に連れて行ってってくれと言ったら、あそこに連れて行かれたんです。上から眺めて、少し道を歩いて終わりました。家などには一歩も入れてくれませんでした。

小林：見せるという観光から少しも変わってないということだね。そういう意味でいうと、あそこは段々客が減ってくるんじゃないか。体験や人の交流の面白さが他と比べると少ないですからね。

黒須：肇興のような観光の拠点が最初に開発されて、その周辺のあまり開発の波に荒らされてない村に徐々に手が伸びて行っているという様子が明瞭に感じられました。今後は、車が入らないところとか、トレッキングでないと行けないところに伸びていくんでしょうか…

○観光における漢族と少数民族の関係

石森：つかみにくい大きな問題が、漢民族と少数民族の関係です。投資家は、基本的に漢族が多い。ガイドも漢族が多いですね。

黒須：凱里の方に少数民族専門の旅行会社がありますよね。あそこで日本語ができる人は、どれくらいいるのでしょうか



肇興のメインストリート

うか。

緒川：2人です。黔東南国際旅行社という旅行社があつて、元は州の旅游局系です。ミャオ族かどうかはわかりませんが。

小林：次の段階として、少数民族の経営による旅行社がどれくらい出てくるかですね。見られる立場のままにいるか、案内する方にまわってくるかどうかだ。雇われていた人がその手法を学んで、自分の会社を起こして始めていくという、次の段階が重要だ。



車江村の鼓楼

山村：肇興の町でも、商店経営者に話を聞いてみると、結構、漢族の人が入って来ているということでしたね。どういう関わり方をするかですかね。

小林：そうすると、今、家を建て直している人が、どういう人が聞いてみたかったですね。急激に建て直しているからね。

山村：やはり、資本やノウハウがあるのは外部から来た人ですからね。

小林：そういう人々をどんどん受け入れていくかどうか。

山村：もう一つは、石森先生がおっしゃるように、地元から起業家をどう育成するかということですね。

小林：呉正光さんと呉徳海さんが、ミャオ族と漢族の中間にいて指導できたということは、ものすごく大きいですね。直接、漢族がやったら文化や社会についての理解も足りないし、心理的に違う。呉さんの場合は、国家の組織にしながら、なおかつミャオや少数民族のことを考えている。この立場が非常に重要ですね。

石森：国家の要職にありながらという。

小林：この二人の間でも違いがあつて面白かったですね。トン族の方は、そういう立場の人がいないのでしょうか。元々、呉正光さんは、トンの風雨橋と鼓楼の写真展を北京でやられたんですよね。

緒川：当初はトン文化を売り出そうとしていたそうです。

石森：確かに、鼓楼は絵にもなるし、観光の空間の中心にもなる。

ミャオ族とトン族の比較ができると面白いですね。

山村：そうなると何年間か住み込む必要がありますね（笑）。

○自律的地域の生きた観光

石森：持続可能な観光ということが、世界的な課題になっていて、欧米の方が進んでい

るところもあることは事実だろう。しかし自律的観光ということで考えると、今回見た郎徳上寨のようなところは、自律的に村の観光をやっている。村を挙げてやっている。これは珍しいと思う。アントレプレナーはどの民族でもいるだろうし、国家主導型もよくあるのだが、村の中に知恵者がいて、外の力を借りながらも、村のルールでやっていくというのは珍しい例だと思う。村の中でも、書記と鬼師がうまく役割分担して観光開発を進めていた。

小林：地主がいて小作がいてという社会が、共産党の社会で一旦、崩されて、村のコミュニティが新しい形で作り直された。それがまだ活着している間に、観光に利用できたということが大きかったかもしれないですね。多分、第二次大戦以前だったら、絶対的な地主がいて…

山村：おそらく富がそこに集中する仕組みになっていましたね。

小林：それが、村としての自律性をもちえた理由かもしれないですね。

石森：そういう点をみなさんに意識してもらいたいですね。自律性と他律性、内発性と外発性というものをね。もちろん「純粹に自律」「純粹に自発」というのはないでしょう。しかし一番重要な要素は、地元の側で決めていく、ということです。そういう点で今回の事例は本当に感心しました。中国は凄いいところですね。また、あれだけの棚田をつくり上げるのは大変ですよ。

小林：棚田の棚の高さが高いですね。物凄く急峻なところに造っているからですね。もともとは一体どんなところだったのか…と思いますね。

石森：石組みですね。いくら石が豊富にあるとは言えね、あんなに積んでいるのは…負けますね。

小林：日本とスケール感が違いますね。

山村：管理も行き届いていましたね。

小林：どの棚田も綺麗でしたしね。“活着している感じ”ですね。

石森：世話しに行くだけでも大変でしょう。

小林：確かに農具を置いているような小屋が点々とあるのですが、少ないですよ。

石森：凄いですよね。それと、少数民族は、虐げられたイメージがあるんですが、あの地域に限れば多数民族になっていますね。

小林：我々も、漢民族的な見方に知らない間に慣れてしまっているのかもしれないですね。

山村：少数民族観光やエスニック・ツーリズムの本を読んでいると、どうしても、少数者に対する抑圧の状況を強調して、批判的に書いている



堂安村の棚田

ものが多い。もちろんそうした事実から目をそむけるべきではないのですが、実際に現地に行ってみてより強く感じるのは、少数民族は被抑圧者であるということ以上に、独自の文化を持った誇り高い存在である、ということです。その世界では少数者ではなくまさに中心なんですね。例えば今回見た貴州省のミャオ族居住地区も、あれはあれで一つの国家、ミャオ世界と見た方がよいですね。

○訪れる側も作法を、迎える側も感動を

黒須：旅程の最後の方で、貴州を出て桂林に来たとき、食べるものにしても、何にしても、寂しいような感覚がして、一体この感覚はどこから来るのかなと考えました。

石森：それが、まさに観光なるものの原点となる、“感動”というものでしょうか。郎徳上寨で陳さんに会って、山奥にこういう立派な人がいるのかという感動、呉先生にしても、民族の誇りを持って、要職をこなしながら、仕事を超えることをやっている、そういうことを見て、聞いての、ある種の感動ですね。

小林：呉先生の方も我々とあったことを喜んでくれましたね。

石森：観光は、元々未知なる自然や人との出会いだから、双方共に感動がないといけなはずなんです。しかしだんだんとルーチン化して。それが観光の衰しいところですね。

小林：桂林に来たら、まさにその落差を感じましたね。

山村：それは食べ物に顕著に出ていますね。残念ながら桂林で食べたものの味は、観光客に媚を売りすぎている味でした。それより「食べなきゃ食べなくても良い」とでも言えるものを出してもらった方が私は気持ちが良いですね。

石森：同じ白菜でも味が違いましたね。白菜そのものの存在感がある。

小林：違いましたね。桂林では食べる気がしなかったですからね。

緒川：味気ないというか。

小林：観光もそうかもしれないですね。

石森：さっき山村さんが言ったように、「職業になってしまった途端にアカンようになってしまう」のかも知れないですね。

小林：それが一つの答えですね。今回見た貴州の村々は、農業をちゃんとやっている。

山村：私も観光は“目的”化させてはいけないんじゃないか、と最近思います。あくまでも観光は“手段”であって、“目的”になった時点で観光ではなくなるのではないかと。

石森：我々が予定にない客なのに迎えてもらえた村がありましたね。

山村：季刀村ですね。

石森：なんとなく迎える側も、ワクワクしていてね。もう来たのか！と飛んで出てきたよね。ある種の祭りなんですね。あれは。

小林：我々の後から来たツアー客の態度は、村に対して失礼だなと思いましたね。歓迎

の酒を飲まされたときに、ものすごく嫌な顔をして、すぐ水を飲んだりしていたでしょう？入っていく側も、その習慣に混じりきれないと、なかなか交流ってできないのかなと思う。

緒川：客の側の作法ですね。

小林：そういうことも見ることで結果的に良かった。

黒須：そこで酒を飲み、迎える側と一体化することが、まさに観光の“スピリッツ”なんだということですね。

小林：観光というのは減るものではなくて、こっちも楽しいけど、来ている人にも楽しんでもらうという、そういう原点を見た感じですね。

緒川：曾先生の論文に、旅行社側、ガイド側にそういう教育がまだ出来てないと書いてありましたね。

小林：我々が見たツアー客も、全然出来てないようだったからそうなのでしょうね。

小林：さて、それでは、そろそろ時間が来ました。今回は、良いルートでしかも実り多い、中身の濃い旅行ができたと思います。皆様お疲れさまでした。

全員：お疲れ様でした。ありがとうございました。

2) 事後研究会

日時：2007年8月10日金曜日 13:00～15:00

場所：北海道大学観光学高等研究センター 石森教授研究室

出席者：北海道大学観光学高等研究センター長 石森 秀三 教授
北海道大学観光学高等研究センター 山村 高淑 准教授
財団法人日本交通公社 小林 英俊 理事
緒川 弘孝 客員研究員

○地域の自律性に基づく観光

小林：貴州省の少数民族観光の成功の要因として、いろいろと考えられますが、まずは、同じ民族の人が地元政府、あるいは中央政府のパイプ役になっていたということ、具体的には、2人の呉さんがそういう役職に就けていたことは、大きかったと思います。またその他の成功要因としては、住民みんなが関われるようにする、正業を大事にする、地域資源保護を大事にするといったことが挙げられます。

そしてこうした要因をまとめる概念として、“観光地の自律性”というものがある。観光地側の自律性をどうやって持たせるか、という大きなテーマだ。

この研究を通して、少数民族が観光をうまくやっているというだけでなく、日本においても、自律性というものをどうしたら地域は持つことができるのか、普遍化させて議論していければと思う。

○どこまで文化の変容を認めるか

小林：今後の重要な課題の一つとして、文化の保全・継承を、観光と絡めながらどうやって進めていくのかという問題がある。トン族の村で、本来は伝統的に女性が踊らない踊りを、観光客向けに女性が踊っていたりする例がありました。それはそれで面白いと思ったのですが、どこまでこのように伝統を柔軟に変化させることができるのかは非常に重要な論点だと思う。

たまたま黒須君から、トン族文化とミャオ族文化が混ざったような出し物を、桂林で観光客向けにやっていたと聞きました。桂林の町から1時間ぐらい離れた農村に大掛かりな舞台を造ってショーを上演しているそうです。元々トン族はいたけれど、ミャオ族はあまりいない地区なのに、完全に見世物化して、両方混ざったようなものを行っている。我々は既にミャオ族とトン族の集落を見ているから、ミャオ族とトン族の舞踏の違いがわかります。しかし普通、外国人はよくわからないから、そういうものがあると逆に魅力を感じてしまう可能性もある。

アボリジニでも、ドットで描くのは北方のアボリジニだけなのに、南方のアボリジニも、観光客に「そういう絵がないか？」と聞かれたことがきっかけとなって描き始めたという例がある。そういう文化の保存・継承の問題と、観光の問題とをどのように絡めて考えるのか。観光が今のところ文化の保存・継承に有効に作用していても、今後どうなっていくのか。もっと観光客が増えてきたら、どんどん似て非なるものが生まれてくる可能性もある。

緒川：紅楓湖でも、随分と新しいタイプの民族衣装があつて、“モーニング娘。”のようなものもありましたね（笑）。

小林：それがどこまで許されるのだろうかというのも研究対象になる。

石森：小林さんのおっしゃったのと同じで、サイパンにもいい加減なものがありました。小さな船でショーみたいなものをやっているのですが、内容がタヒチ風なんです。でも日本人にはわからない。専門的に見ると、全然違う。真正性はある程度、見る側がわかっていないと、「南太平洋風だな」で終わってしまう。文化にはそういう壊れやすさがある一方で、数年続けていると、それが一つの新しい文化になってしまうこともある。中国もそのへんは、わりと可變的でしょう？

山村：非常に可變的ですね。いい加減というか。著作権問題と絡めて議論できるかも知れません。ニセモノという感覚がちょっと我々と違うんですね。

石森：ある種、知的所有権の問題ですね。

緒川：山村先生は、雲南省の方で民族衣装の研究もされていましたが。

山村：ナシ族の衣装などは、どんどん新しいタイプが出ていて、私は成功事例だと思っています。なぜかと言うと、私が勝手に「プロトタイプ」と名付けているんですが、伝統的に長い間ずっと着てきたものを「型」としてちゃんと保持した上で、新しいものを作っている。その役割分担ですね。保存すべきものと、新たに活用するもの。その両者の位置づけさえしっかりしていれば、活用する分は、いくら活用しても良い。オリジナルのここからこう取って、こうしているんですよ、という説明さえできれば、良いと思うんです。その二つの関係性をお互いにメリットがあるような形にできれば、一つの答えが出るのかなと思います。例えば観光で儲かった金を「型」の保存に回すとか。

逆に古典的な「型」を保持せず、どんどん形や表現、あり方を変えていっていると、結局何がなんだかわからなくなってしまう。例えばナシ族の衣装の場合、7つあった星のマークは必ず残しています。これだけは変えられない民族のデザインです、ということが自分で説明できる。それが一つのやり方なのかなと思います。観光客側も興味を持って「元々のものはどうなんですか？」と質問すると、隣でおばあちゃんが着ているとか、そういうあり方が良いのではという気がしています。

緒川：起源が説明できるというのが、一つのボーダーラインでしょうか？

山村：そうだと思います。

○外とつながりつつ保たれる地域の自律性

山村：小林先生がおっしゃった“自律性”に関して、私も同感です。上級政府と地方政府と地元の間が、どういうパイプでつながっているのか。町づくりでよく問題になるのが、こうした行政と住民との協働のあり方です。そして往々にして両者は乖離しているから、その間をNGOやボランティアが結ぶこととなります。しかし、貴州で見た例では、上級政府にも地方政府にも住民にも、個人的に繋がっている部分がある。うまく意思疎通ができていました。

小林：価値の共有ができていましたね。

山村：はい。

小林：地元の側が勝手に独り歩きしてもうまくいかない。地元が自主的にはやるのだけれど、上級政府が理解し、認めてくれたり、サポートしてくれたりしないと、なかなかうまくいかない。もう一つは、例えば郎徳上寨で、ある時期、上から肥料を配給しないと言われて、自分たちのお金で買ったという話がありました。こうしたぶれない芯が一本通ってないと地域の自律は難しい。価値の共有化と、揺さぶりがあったときにぶれないということ。この二点が、自律の要件ではないか。

○公平な観光収入の再配分と自由競争

山村：事例の成功要因を分析する際、自律性を獲得するための要件というふうにかけて、例えば再配分制度、資金に関するしくみづくりなど、関連する項目ごとに見ていくと全体像が見えてくると思います。

小林：観光収入の基本的な部分はみんなで公平に分けるが、その上で、それぞれの知恵でプラス α を稼げるという二重構造になっていたところが大事かもしれない。みんなに収入が入る部分とは別に、おばちゃんたちが個々の才覚で稼げる部分がある。ベースのところは全体で再配分。この二重構造性は、やる気を削がないし、利益に与れない人を出さないという仕組みになっている。再配分だけでなく、プラス自由裁量で知恵をお金に換える仕組みを同時に残している。

山村：人民公社が改革してきたプロセスで、そういう二重の収入の構造の仕組みが既にあったのが非常に良かったのではないのでしょうか。

小林：日本で「再配分制度をベースにします」と言ったときには「え～」という反応になる。それを新しくつくるというのは大変。

石森：必ず反発がある。

小林：白川郷だって既に一番収入がある家では年間 8,000 万円ぐらい稼いでいる。家屋を直すときは9割ぐらい補助金など外の金で直せてしまう。それで良いのかという話になる。収入の半分は仕方がない。残り半分は地域に分けるという仕組みがないと。

山村：そういう意味で中国の農村部の共産党関係の人と話していると、都市部の共産党と全然違っている感じを受けます。都市部だと“金”なんですけれども、農村部だと自分は共産党員で「分配しないとイケない」とか、「みんなに共通の利益を」という、昔の古き良き社会主義の理想というものをちゃんと持っている人が結構いますね。都市部の共産党員がどんどん金に走っている一方で、農村の共産党員には「あんなのは共産主義ではない。自分たちが守るんだ」という政治意識というものが、時代遅れなのかもしれないですが、あります。

小林：それはすごいね。それを哲学として信じているところが。それがなくなったときに、新たにつくりだせるのかなと思う。他にも自律的、再配分的なことをやっている地域を見つけてきて、それがどうやって出来たのかということの中から、共通する普遍性が何かを抽出する。これは重要なテーマになる。果たして共産主義の中国でないとできないことなのか。

○観光以外の正業を大事にする観光地

小林：正業を大事にする観光地というのが、地域の観光としてあるべきだと思っていて、最近、地方の講演で必ず言うようにしている。自分の正業を大事にしない地域なんて、観光地としても魅力がない。

石森：そういうところに限ってね、えてして、正業を横に置いて、観光で何とかしようとするが、それはあり得ないですね。でもそういうところが圧倒的に多い。

山村：資源あつての観光で、観光だけの観光というのは存在し得ないですよ。

小林：観光業で食べる人の数というのは、知れていると思う。郎徳上寨で面白かったのは、拡声器で人を集めていたところ。「手が空いて参加できる人は参加して下さい」という感じで、全員参加の義務はない。来られる人だけ来れば良いという、あれが良いんだろうと思う。

○迎える側の観光教育

山村：今後の課題で、旅行者ガイドの問題があります。発地側の問題もありますが、コミュニティ・ベースド・ツーリズムを考える際は、着地側、地元の側でガイドをどう育成するのかが、非常に重要な問題になります。しかし現状では、住民あるいは民族の中でガイドを育てたい、でも、ノウハウがない、というのが、多くの場所で問題になっていますね。

小林：カカドゥでは、あるサイトの説明につき、例えばガイド4人のうち2人はアボリジニを入れる、というような仕組みがある。アボリジニの土地所有概念の話を、白人がしても説得力がない。しかし正規のレンジャーではないけれども、説明員としてお

金が支払われてアボリジニが説明する。完璧でなくても、当事者が話すことによって意味がある場合もある。旅行会社でも、そういうふうにしていかないといけない。

緒川：陳正濤さんの息子さんが、貴陽の旅行会社に勤めているとおっしゃってましたね。そういう人が地元に戻ってくれば、一つの核になると思います。

小林：“教育”と言うと、言葉として難しいね。旅行者を教育するというのは…。

緒川：“啓蒙”でしょうか。

山村：直接観光には関わらない人も含めてですけれども、子供とか住民に観光客との付き合い方のノウハウを教えるということも大事ですね。観光客とか、ホストとゲストとか言ってしまうとわかりにくいのですが、要は他人との付き合い方や接し方です。また、ホスト・ゲスト双方に、マナーやしきたりがあるのはじめて観光が成り立つんだということを、着地・発地双方でうまくつくりあげる必要性がある。

小林：宮崎では、「子供の観光読本」という教材があって、子供にとって宮崎の観光とは何かということが書かれています。これは、カリブのどこかの国でつくられた読本を参考に作られたものです。自分の国は観光で成り立っている。観光客が来たことでどうなってきたのか。そして、あなただって違う国に行けば観光客なんだよ、と書いてある。宮崎でもそうした読本を作って副教材にしている。沖縄でもつくっている。観光の意義というものを子供たちに教える。ツェルマットなども、観光局の局長が年に1、2回小学校に行き、説明する。そうすると子供たちは、自分の村に観光客が来るということは、どういうことかがわかるから、外国人を見たら挨拶するようになったという。そういうように変わっていく。そういうことを今の時点でやっていかなければならない。今のままだと、ただ好奇の目で見ていただけ。

○旅行者にも必要な旅育

石森：最近、子供の旅行離れも深刻だと思う。

小林：今年あった資料で、旅行が大変好きと答えた人が全体の25%ぐらいいたというのがあった。そしてその人たちに小学校のときにどれくらい旅行したかと聞いたら、毎年1回以上という人が45%ぐらいいた。子供の頃に良い体験をさせておくと、みんな旅行が好きになる。明らかに因果関係がある。旅というのは誰でもできるわけではない。旅なんか勝手に行けば良いと思っている人が多いけれど、楽器演奏と同じように、ある程度手ほどきしてやらないとできない。

山村：考えてみたら、私も旅好きなんですけれども、物心ついた子供の頃から、毎年必ず夏休みの頃、「この日程は空けておけ、旅行に行くから」と父親に言われていました。強制的な旅の教育ですね。

緒川：当時の日本人にしては、かなり稀有ですね。無条件に旅行が好きと考えてはいけないんですね。

山村：しかも他の行事と重なっても、絶対家族旅行が一番重要なんだから、他の用事は断りなさい、と父に言われていたんです。

石森：「旅育」という概念が必要なのではないのでしょうか。

小林：海外旅行に何回も行く人を調べたら、子供の頃に親に連れられてよく旅行している。もっと大事なことは、旅行が好きの人が何回も旅行に行っていて、旅行者の主流となっている点です。旅行がまあまあ好きとか、どちらかと言ったら好きというような人は、逆に最近旅行回数が減ってきている。これが昨今、旅行者数が伸びて来ない大きな背景です。旅行好きや旅行の意義を知る人を増やさない限りは、旅行離れの問題は解決しない。休暇や金をどうするといった以前の問題で、マインドの問題なんです。

石森：旅育とは何か。一つは旅そのものが人を育てるのだ、という考え方。そしてもう一つは、旅をするということ、そのもののやり方をうまく教え、育ててあげること。旅の楽しさをいかに育むか、ということです。旅に出れば、確実に様々なことを学ぶけれども、それ以前に、旅の楽しさそのものをうまく育ててあげないと。僕は、旅行減税しろと提案している。確定申告で旅行に要した経費を控除する。すると裾野が広いから、経済的にも影響は大きい。観光立国には、“旅育”という面もあるし、健康増進にもなれば医療費も削減できる。政治家はそれぐらい言うべき。

○コミュニティがまとまる適正な大きさ

山村：人がまとまる単位として“100戸500人”というのが、ずっと気になっています。

白川郷荻町集落は149戸604人。竹富島が172戸で342人です。ただ竹富島の場合は集落が2つなんですね。そのあたりの規模が、うまくいく単位と言えるのではないかな。

緒川：宮崎県に諸塚村というところがありまして、そこは人口が2千人ぐらいなのですが、村の自治公民館制度というのが全国的に有名で、村の権限を公民館にかなり委譲しているんですね。税金を徴収して徴税率100%を達成したり、林道網密度が日本一だったりしているのですが、その林道の計画、整備、維持などにも住民が参加している。グリーンツーリズムや神楽などの伝統文化の継承も公民館単位でやっている。その公民館が全部で16あって、昔は1公民館あたりちょうど500人ぐらい。今は過疎化で人口が減少してきて、200人弱になっている。そうなると、その公民館制



郎徳上寨の家並み

度が今の時代にも合わなくなっていて、役職がきついか行事を村単位にしてくれという意見が出てきているんです。コミュニティの単位として、500人の頃はうまくいっていた。

小林：ロードハウ島も人口が300人あまりで、それで島に入ることのできる観光客の数を400ベッドに設定している。そういう、まとまる単位というのはあるかもしれないですね。飯田などでもグリーンツーリズムがうまくいっているのですが、あれも公民館運動がベースですね。観光客の受け入れのようなことを公民館運動という一つの塊の中でやっています。一軒一軒口説いて行ったら大変ですが、集落ごとに20人受けてくださいというようにやるわけです。“100戸500人”という説は一つの仮説として面白いですね。どれくらいのまとまりが一番やりやすくて意思統一も図れるのか。あまり少ないと意思統一は取れるが、実質的な面で動けない。

山村：この仮説を考えていくと、受け入れ可能なキャパシティが見えてきて、地域がどう観光をコントロールするべきかという役割も見えてくるかも知れません。

緒川：今、山村先生がおっしゃった500人ぐらいだと、名前と顔が覚えられる範囲ですね。

山村：名前を正確にわからなくても、鈴木さんの息子だとか、誰々のお兄さんだとかと言うところがわかる範囲ですね。

緒川：田舎の人に聞いても、やはり村単位だと数千人の規模になるので、そうなると村人はすべて「見たこと、あるなあ」くらいでわかるのですが、顔と名前を全員覚えるところまではいかないらしいですね。

石森：そのあたり、地域の自律性と関わりがあるのかもしれませんがね。ある程度、お互いを知っていないと。

山村：そういう土台がないと、利益の再配分もできないですしね。

○コミュニティの自律が観光の基本

緒川：500人のコミュニティでは、ある意味、今の時代では縛りがきつい面もあると思います。中山間地域や農村の旧来型のキッチリしたコミュニティは束縛がきついという意見もある。その結果、人口が流出し、地域の疲弊につながっている面もあります。都会から過疎の村に人を入れるとなると、多分、郎徳上寨型のような“キッチリ型”はきついなど。

小林：だけどコミュニティにおいて「最低限、こういうことをやろう」という、そういうルールを再構築することは重要だ。日本でも、水俣の集落の例がある。従来、集落の水を大事にするということは、みんな言わなくてもわかっていた。今はあえてそういうことを言わないとダメになってきている。河原のものを勝手に取っちゃいけないという暗黙の了解があったのに、どこかの業者が入ってきて勝手に取っちゃうとか。

そういうことをルール化したことによって、「ダメなんだよ」と言えるようになった。このように、暗黙の了解を明文化していくということで、ルールを再構築していくやり方はあると思う。昔のままのコミュニティのあり方だと確かに現代生活はきつい。ルールを破ったら村八分になったりするとか…しかし、「最低限こういうことをやろう」という確認をとりながら、コミュニティ意識をつくりあげていくことが、今は重要なことなのだと思う。現在は、きつすぎるといって以前にバラバラになっていますから。

緒川：そういう点で、西欧か東欧かわからないですけども、西洋型のコミュニティ・ベースの観光がどうなっているかということと比較すると面白いと思います。

山村：コミュニティ・ベースのまちづくりという観点ですと、アメリカで非常に活発な議論がされていますね。

小林：ウィスラー（カナダ西部の世界有数のスキー・リゾート地）では、スキー場を開発するときに、まずコミュニティをどうするかという議論をしているわけです。日本だと、まずリフトをどうするか、どれくらいの規模のスキー場をつくるのかという話になる。しかしウィスラーではそれができたときのコミュニティをどうつくるかという話から始ったという話を聞いて、全然発想が違うなと思った。

石森：本来、そうあるべきですね。

小林：もう少し研究したら面白いと思います。僕はコミュニティがしっかりしていないところに観光は根付かない、と言いつけています。

石森：“地域の自律”もそういう基盤がないとね。ごく数人が自律して頑張りますと言っても、現実には難しい。共同体というものは、わずらわしいものだけれど、何かあったときには大事な存在。共同体の表裏、功罪というか、悪い面だけではなく良い面を見ないといけないですね。とりあえず主婦は、朝起きたら火起こしして、煙を出しとかなないと「あそこの奥さんは、まったく…」と言われる。だけど、本当に何かあったときに、皆が心配して良くしてくれる。一面では確かに村八分というものがあつたりするけど、その裏返しとして何かあれば皆で助け合う。今は、わずらわしきから何かあってもお互い気づきもしない。何かやろうとしても、櫛の歯が欠けるように一部の人のだけになってしまう。

○再配分の様々な形

小林：今の日本は、アメリカの自由主義というものを勝手に拡大解釈しているところがある。自由放任、勝手放題に捉えているが、アメリカに行ったら全然そんなことはない。

石森：日本では、ある種、株主資本主義というように捉えている感がありますね。株主がすべてだ、会社は株主のためだけにある、といったように。

小林：一部だけ強調して取り入れた弊害かもしれませんね。

石森：会社は、まず社長がいて社員がいて、はじめて成り立っている。金があれば会社が動くかと言うと、それは論外。それと同じように、1人の優れた者がいればすべて何とかなるかという、そうではないですよ。コミュニティがあって、はじめて成り立つ。

山村：歴史的に古いきつい仕組みというような言い方をされましたが、アメリカなど相対的に見て歴史が短いというか、そういう国でコミュニティの研究が盛んだというのは非常に興味深いと思います。アジアの中でも、日本の都市部や中国の都市部、台湾などでコミュニティ関係の議論が盛んです。そう考えると、今まで議論しているレベルとは違うレベルでのコミュニティの見方があるのかなという気がします。

石森：コミュニティ・ベースド・ツーリズムの成功要因を考える際、まずはコミュニティがきちんとしているというのが大前提としてある。まずは、コミュニティがきちんとしているかどうか。コインの裏表のようなもので、優れたリーダーがいるところはコミュニティがしっかりしているのだろうし、そういうところは哲学がきちんとしていて、現実的な金に関わる面では、観光収入の公平な再配分がある。そういうふうにと考えると、まずはコミュニティのコンセプトそのものをきちんと押さえないといけない。コミュニティとは何ぞや。コミュニティなるものがベースになって観光開発、観光振興が行われているのかどうか。それがうまくいっているところと、うまくいっていないところ。

コミュニティがしっかりしている郎徳上寨では、我々から見てもなかなかの人物がいましたね。直接お話を聞くと、そういうリーダーには、なるほどという哲学があった。でも哲学だけでもだめ。美しい面だけでは観光は動かない。観光が怖いのは、もろに現金が動きますからね。結局観光開発がうまくいっているところは、利益の公平な再配分をやっている。そういう点で貴州省におけるコミュニティ・ベースド・ツーリズムの成功要因というのは、ある程度共通しているものがあると思います。

それから、段々畑の景観や藍染などの工芸にしろ、伝統的な正業で、きちんと仕事をしているところは、結果として、いろんな文化財、自然景観も守られるということがありました。この点も重要だと思います。

小林：今挙がっている成功要因を一つ上の概念でまとめていくことができれば筋道が立ってくる。再配分について考えると、皆が皆、儲けられるわけではないから、老漢族の天龍屯堡古鎮などでは、下水道の整備など違う形の再配分をしていて、あれは面白いなと思った。観光収入をどう使うかで——もちろんその全部ではないけれども——皆のために使っている。形を変えた再配分ですね。

山村：天龍屯堡古鎮は、外部に出た企業家が出資者なんですよね。これは漢民族の典型的な性格で、海外に出た華僑が自分の故郷に仕送りをする。今年世界遺産になった広東の街も海外に出た華僑が儲けたお金でその村に建物を立てて、その西洋式の建物が

登録された。本来は行政がやるべきことまで村の成功者がやるような文化があるんでしょうね。

小林：昔、日本でもそういうようなところがありましたね。

石森：人も育てたしね。成功者のところに居候してね。

山村：呉さんの話をみんなが聞くというのも、そういうところにあるかもしれませんね。



老漢族の村・天龍屯堡古鎮

石森：おそらく今話している点は、コミュニティ・ベースド・ツーリズムの成功条件になるのではないか。

小林：そのへんは、もう少し広げて、普遍化できる要素は、貴州に限らず普遍化できる、というところまで考えてみたいですね。

○祭りでまとまるコミュニティの単位

小林：高山などでも、町内別に祭りの屋台を持っていて、それを維持するための「講（同一の信仰を持つ人の結社）」がベースにあった。そこから、町内を綺麗にしようとか、宮川を綺麗にしようという運動があり、ポケットパーク構想や観光振興の面に広がっていった。そういう例のベースにあるものは、貴州の例と同じだと思うんです。その一つの講の大きさは、もしかしたら 500 人くらいかもしれない。それを調べてみると、山村さんの仮説が適用できるかもしれない。京都でも山鉾ごとの規模というものを調べてみると面白いかもしれない。

石森：小林さんのお話を敷衍すると“祭り”なんですよ。まさにコミュニティであり、共同体であり、宗教的共同体であり、生活共同体である。祭りが維持されているところに、何事によらずまとまりがある。祭りを村として維持している範囲も調べないといけないんでしょうね。

山村：昔、人民公社だった範囲と今の村の範囲が一緒というのも、重要なポイントかもしれません。このレベルで物事をすすめるとうまくまとまる例が多いような気がします。その上のレベルでも下のレベルでも難しい。

石森：観光を手がけるのも、そういうレベルで手がけるべきというわけですね。

山村：言葉の問題ですけど、人民公社は、まさに「ピープルズ・コミュニン（people's commune)」。そうするとコミュニティというのもそういう風に考えるといいのかなと思います。つまり、仕組みそのものをコミュニティと呼んでみた方が良いかもしれない。講やお祭りという仕組みもコミュニティ。人の集合体をコミュニティと考えよ

うとすると、これがなかなかうまくつかめないんです。ですからコミュニティ=仕組みをどうつくっていくかという議論がわかりやすいのかなど。アメリカの開催された「コミュニティ・デザイン」の国際会議に参加したことがあります。コミュニティをいかに我々はデザインすべきかという議論をする会議です。そこでもやはり仕組みづくりに関する議論が多かったように思います。

石森：観光創造の一つのテーマですね。新しい観光をある地域でつくる時に、まず母体たるものがきちんと定められないとうまくいきませんね。

小林：そうですね。母体としてのコミュニティをしっかり定めること、コミュニティを再生することこそが、観光を再構築するきっかけとなり、そして観光を継続的に作りあげる力となるのではないか。そういう力を持って欲しい、と思っています。だからこそ地域は観光に取り込む意味があるのでないかとも言えると思います。

石森：かつては祭りを皆でやる制度が、共同体としてあった。今はそれも崩れてきているところが多い。だから、何か、観光を皆で考えて、つくってやっていこうというような動きが、次の新しいコミュニティを形成するという面もあるかもしれないですね。

緒川：郎徳上寨の場合は、シャーマンの祀りごと、もともとの人民公社の単位で行っているんですね。

山村：その重なり具合が、うまく一致しているんですね。

緒川：中国のどこでも、それが重なっているのですか？

山村：他の地域でも、そのようです。郷鎮企業で工業化がうまくいっている村というのも、基本的にそうです。郷鎮企業はうまくいくけど、都市部はうまくいかない理由はそこにあるのだと思っています。都市部は新中国成立後（1949～）、職場単位のコミュニティに改変してしまった。今までの居住地レベルのコミュニティを解体して職場で集合させて、そこで全員住まわせるということをやったので、旧来のコミュニティはメチャメチャになってしまった。

○日本でも可能な地縁をベースとしたツーリズム

石森：そういう意味では“社縁”なんですね。やはり今後は“地縁”の見直しが必要なのもかもしれませんね。今、我々がやっているのは、“地縁ベースド・ツーリズム”かもしれない。“社縁ベースド・ツーリズム”もあり得るかもしれないけど（笑）。

小林：“社縁”＝“職縁”と言えば、“インセンティブ・ツアー”がそうかもしれませんね。取引先、社内などで成績が良かった人にご褒美で旅行に行かせるというものです。

“地縁”について、なるほどと思った事例がありました。飯田でグリーンツーリズムがなぜ成功したかという例です。最初、まずはある地区をモデルにした。そこで子供たちの受け入れを行ったらうまくいった。それを「こんなことをやったらうまくいぞ」と皆に知らせたわけです。頑張っって成功したご婦人をスピーカーにして、いろん

なところでしゃべってもらった。そうしたら「うちの集落でもやらせろ」と気運が上がっていった。そこで希望者に手を上げさせたわけです。多分、これを市域全体で10万人全部に声をかけていたら成功していたかどうかはわからない。一気にやってはいけない。300~500人を単位にしてもの考えた方がうまくいくというのは面白いかも知れません。

山村：それが言葉を換えると、“口コミ情報”が広がる適正な範囲なのかも知れませんね。メディアが機械的なメディアではなく、人と人が1対1のコミュニケーションで言葉や真意が伝わるという範囲です。

緒川：昨今の市町村合併でそういうレベルのコミュニティはどうなるのでしょうか。やはり、あまり大き過ぎる抽象的なものには自分のアイデンティティの依りどころとしての実感を築けない。そういう意味では、日本の危機かも知れません。

石森：まさにこれからは“地縁ベースド・ツーリズム”が必要というわけですね。

小林：それは面白いと思いますね。

山村：エコミュージアムのコアとサテライトに当たるのが、“地縁ベース”だと“神社”とか“公民館”になるんでしょうね。そういう発想が面白いし、必要なことだと思います。

石森：現実にそうですしね。

緒川：あまり規模が大きすぎると、「自分が何かやってもどうせ変わらないだろう」と思ってしまうかもしれない。でも500人ぐらいの規模だったら、自分が何かやったら変わる。そうするとモチベーションが上がるという点もありますね。

石森：今回は貴州省の事例ですが、他の事例と比較する意味も出てきますね。

山村：これがうまくまとまれば、コミュニティ・ベースド・ツーリズムの評価基準というか、判断指標が作れるかも知れません。チェックリストみたいな。

小林：自分たちがどこまで達成出来ているかチェックできるやつですね。

石森：もう少し普遍化する仕組みができれば、次に繋がりますね。日本の事例なども比較に入れると面白い。

小林：そういう意味では日本でも事例はある。祭りとか公民館が良い例ですね。沖縄なども公民館運動が盛んですから、良い事例があるかもしれない。飯田も公民館運動の名残が残っているから、集落単位での結びつきが物凄く強い。講演に呼ばれるときも、市民全体向けというより、集落単位で来てくれと言われる。そこでワークショップをやったら、物凄く熱心なんですね。300人ぐらい来たところもあった。そこでカード会社の機関紙を通じてリンゴの木のオーナー制度を募集したら、去年は、名前の響きが良い安曇野村に200人ぐらい集まった一方、その集落には一組しか来なかった。それでも、集落みんなで大歓迎したわけです。そうしたら、その一組が大感激して、編集部「こんなにすごかった。安曇野村とは全然違うぞ」と伝えた。すると今度は編集部の人が取材に来て記事になった。そしたら、今年はみんながそっちの集落に集まった。何も無いところだけど、何とかしたいと言うので、私はワークショップで「観

光というのは、観光客が来ることではなくて、地域を面白くすることですよ」と言い続けて来た。そしたら、皆乗っちゃって「リンゴの木のオーナー制度ぐらいだったらできるな」となった。今年、連絡が来てみんな喜んでいるわけです。何も無いところにそんなに人が来て、やっぱりやったら効果があるんですね。そういうコミュニティ・ベースドの例ですね。何も無いところに人が来ている。何も無いけど、みんなの気持ちが連鎖、思いの連鎖がある。集落ごとにそういう動きが出てきて面白いことになってきている。そういうふうに、我々が考えるコミュニティを中心に、日本だってこんなにできるんだ、というところまでこの研究が広がっていくと良いですね。本書を読んで下さる方に対して、「貴州は中国で人民公社があったからできたのだ」という話を伝えるのではなくて、「あなたのところでも、できますよ。それに近い例は日本ではこんな例がありますよ。」ということを伝えられれば良いと思います。その普遍化、エッセンスが何か、というところに至らないと“論”にならない。議論から芽として出していかないと。

●「観光地ライフサイクル論」上での貴州省の位置づけ

(貴州省の観光地をバトラーの観光地ライフサイクル論を軸に論じるあり方について、以下の議論が行われた。)

<バトラーの観光地のライフサイクル曲線上での貴州省の観光地の位置づけ>

小林：紅楓湖民族旅游村は、このまま行くと、衰退する方向に行ってしまうと思う。郎徳上寨の今後のあり方を考えたときに、村自体が、テーマパーク化してしまうということもあるが、もう少し他の選択肢があるはず。郎徳上寨をバトラーの観光地ライフサイクルの曲線上に落としてしまうと、曲線に示された通りに進んでいくと思われるのが嫌ですね。どう表していけばいいかな…

緒川：かなり悩むところですね。

小林：桂林などは、ライフサイクル上で再生段階にあるということは、実際言えそうですね。現在、都市観光的なものを付け加えたり、エンターテイメント、アミューズメント的なもの付け加えたりして、都市としての魅力を向上させようとしているからね。確かに、単なる風景地としての役割はある程度まで行ってしまうている。

緒川：単純に来訪客数で表したグラフにしてしまうと、郎徳上寨と桂林では来訪客数のレベルも全然違うので、同じ曲線には乗らないはずですね。誤解を生むようなら、同じ曲線に乗せない方がよいのですが…

山村：それぞれの事例について1枚ずつグラフがあった方がわかりやすいかもしれませんね。そして、それぞれ今後のシナリオとして、どうすると望ましいのか、として分析を行った方が、面白いかも知れない。

小林：いろんな発展の仕方があると思う。テーマパーク化して衰退するというのも一つ

だけど、そうならないようにするなら、コントロールをうまくやらないといけない、という条件がつかだろうし。あるいは、観光で得た金を保護の方に使っていく仕組みをつくらないと衰退してしまうぞ、とか。まだ初期の段階にある観光地は、今後、単純に同じように発展していくかどうか、わからない。地域が方向性を選択していくということもあるからね。

緒川：バトラーが書いた1980年代の頃は、来訪客数が多ければ良いという考え方があったかもしれませんが。多分、郎徳上寨だと、来訪客数は既に適正規模に達していて、これ以上、数多く来る必要はない。必ずしも、人数を増やしていけば良いかどうかはわからない。ビジュアルにはしにくいですね。

山村：郎徳上寨は、許容収容力の限界の範囲に既にいるかもしれないですね。

緒川：一つの図にすると弊害があるので、やめた方が良いですね。

小林：誤解されるところがあるかも知れないですね。考え方は面白いのですが。やるのだったら、ケースでいくつか示すとかの方が良いと思います。

緒川：一つ一つ細かくやってしまうと、厳密に調査したわけではないので、精粗が激しく出てしまいますね。

山村：もしくは、最初に地名を抜いたこのモデルのグラフと説明を載せておいて、個別には説明する文章で書いていくとか…

小林：その方が良いですね。

<観光地の発展と衰退の様々なパターン>

石森：郎徳上寨などはある種、確立・成熟段階かもしれませんね。

山村：後は下降する可能性もありますからね。

小林：あれをどうやって維持するか…

石森：どこまで伸びるかですね。

小林：曾先生の論文に、「お金が増えている頃はみんな喜ぶ。絶対額は少なくとも、始めた頃は、みんな喜んでいて。人間というのは、変化率で評価するから、2万円から2万5千円もらえる額が上がっても、少し嬉しい程度だけど、千円だったのが6千円になると「すごいことになった！」ということになる。」というようなことが書いてあった。「郎徳上寨でも、観光をやっているけど変わらないと思うようになった」ともありました。面白いなと思いましたが、今はそれ以上の段階に来ているのかもしれないですね。

緒川：若い人などは、物心ついたときから観光客が来ているわけですからね。有り難味が減っていますよね。

小林：来訪者数的に見れば、郎徳上寨はまだ発展段階の始めと思われるが、内容的には既に停滞段階の入口と考えて良いかもしれない。このまま衰退しないようにすれば、どんな展開が考えられるのか。10年経ったらどうなっているのだろう、ということ

も興味がありますね。桂林がまた上昇する可能性がある、というのも面白いですしね。

山村：面白いですね。桂林は1990年代、もう衰退するだろうという感じでしたから。

石森：桂林については、新聞に出ていましたね。ガイドがストライキを起こしたらしい。過当競争になっていて、生活ができないぐらいに賃金が下がっているとか。世界遺産でしょう？当局は強い態度で挑むと言っていました。収容力がいっぱいになって来ているということがありますね。世界遺産はみんな同じ傾向にあると思います。

山村：上って下がる期間が短いですね。

石森：急ですからね。

小林：そういう研究をする人がいても面白いですよ。世界遺産の研究というのは、どちらかと言ったらプラスの発想でやっている。それを、どういう問題を抱えていて、どういう状態になっているのか、ライフサイクルの中で考えると面白いね。

石森：世界遺産というのは、容易に危機遺産になりますし、確かに、ライフサイクル的なことは感じさせるものがある。

小林：同じ種類のもので比較すれば、ある程度はこの曲線で言えるところはありますね。

緒川：紅楓湖などは、収容力の許容限界まで行っていないかもしれないが、観光地としては衰退段階に入っているかもしれません。

山村：おそらく紅楓湖は、確立の前の段階で、今のような状況なのだと思います。

<旅行者側の成熟度の段階>

山村：あと、中国の団体観光客について論じたところがありましたね。観光地のライフサイクルとは別に、旅行者の教育発展段階など、そういった図もできるかも知れません。旅行者側の成熟度というか。

小林：それは面白いですね。観光地は旅行者に育てられる。旅行者は観光地に育てられる、ということですね。十分あり得ますね。

山村：そう考えれば、観光客側だけでなく、着地側のコミュニティの成熟段階というものもありますね。

緒川：中国では、まだ観光旅行が普及し始めたばかりの段階ですね。

小林：日本も初期の頃はそう。「団体客を沢山呼べば良い。ちょっとくらい難があっても問題ない。どんどん来させろ。」という段階ですね。

<持続する観光地について>

小林：郎徳上寨では、観光地として持続させるための工夫として、自分たちの行事を大事にすることによって観光客の案内を結果的に制限していましたよね。それぐらいでしょうか？まだまだ中国の場合、観光客が沢山来た方がハッピーだというのが根底にあるのだと思いますが。

緒川：郎徳上寨で村の人が、観光よりも村の祭事を大事にするような発言をしていて、

面白いなと思った一方、本当かな？と私も思ってしまいました。

山村：「どんなお客さんに来て欲しいですか？」と聞いたときも、「誰でも来て欲しい。ウェルカムだ」とおっしゃっていましたものね。

小林：なかなかそういう制限する考えというのは、まだ中国にはないのではないか。安定して横ばいの状態に落ち着くのが良いことだと言っていたけれど、そうじゃなくて、まだまだ上昇していくのがもっと良いことだという考え方があると思う。

緒川：爆発的な観光ブームの後のソフトランディングが求められますね。

小林：爆発的に発展させないとかね。オーストリアのレッヒ村などでは、ヨーロッパのスキー大会の開催を断っているんです。住民の8割が反対した。一時的に客が来てもしようがないのではないか、ということです。物凄く成熟してるんですよ。コミュニティがしっかりしているから、こっちに行くといけないという場合は断るわけです。

<観光地ごとのシナリオ>

山村：そういう意味で、バトラーの曲線は、観光地のライフサイクルの現状を判断する指標として見るよりは、あるべき姿のシナリオと見た方が良いかもしれませんね。

小林：1980年代までは、これが正しいと思われたシナリオとか。

山村：このバトラーの理論は、段階というものに注目してしまうものですから、どうしても「今はこの段階で、次はこういう段階になる」となる。そうじゃなくて、この表をもとに、自分たちがどういうシナリオで行くべきかという議論に持っていけないと意味がないと思うんです。

小林：それと、観光の意味も変わってきているわけです。さっき言ったように正業を大事にしながらやる観光と、観光地におけるいわゆる観光の問題とは違うかもしれない。つまり、例えばナイアガラなどは、コミュニティがなくても受け入れるしくみさえうまくつくってれば、極端なこと言えば、沢山来た方が、うまくいくわけです。そう考えると、バトラーの観光地ライフサイクル論の今日的意味が出てくるかもしれない。この曲線の通りにいくのは必ずしもハッピーとは限らないと。違うシナリオを観光地の性格ごとに書き上げないといけないとか。

緒川：バトラーの後の研究者も、いろんなカーブを出したり、バトラー自身も自分の理論を発展させたりしていますね。

<地域調和と観光魅力>

緒川：今回、地域調和というのが一つのテーマだったかもしれません。それが観光地の魅力として大きいかなと思います。500人という規模が、地域がうまく調和するものとして適当だとか、地域が調和しないと一時的に人が来ても、魅力がなくなって劣化してしまうとか。多分、地域調和の面は、バトラーの論文などでは十分に考慮されていなかったかもしれません。しかし現在は、地域調和が魅力に直結するような時代

になってきた。

小林：“地域調和型観光”それは面白いですね。今後の魅力ある観光地とは何か。“自律性”と“地域調和性”であるという。

山村：観光地の成功要因の判断指標の話に戻りますが、自律的観光を判断するためには、自律性や地域調和性が項目として使えそうですね。

小林：地域調和性、地域の中でトラブルを起こしていたらだめだ、という項目ですね。

緒川：そういう点で白川郷（世界遺産に登録された合掌造り集落で有名な岐阜県白川村）とか由布院温泉（従来の歓楽街的要素を避け田園風景に囲まれた佇まいを活かした温泉保養地づくりで日本最大級の人気を誇る大分県由布市の温泉地）などでは、そういう地域調和が大分崩れてきて、黒川温泉（露天風呂と温泉街の徹底した風景づくりで近年全国的人気を得ている熊本県南小国町の温泉地）みたいなこじんまりとしたところの方がうまくいっている現状は示唆に富みますね。

小林：黒川あたりの大きさだと、地域の中で誰がどういうことやっているかわかりますね。湯巡り手形なども、利益再配分の方式の一つかもしれませんね。日本においては、なかなか再配分が難しい。初期の由布院は、そのへんがうまくいっていた。旅館のクラス分けをうまくやっていた。客をお互いに取らないとかね。それも再配分のしくみの一つなんだと思います。日本の観光地の旅館というのは安いやつから高いやつまで、全部取ろうとするけど、あそこは分けたんですね。今、何でうまく行ってないかと言うと外部資本が入ってきて、自分のところだけ良ければ良いという業者がいっぱい入ってきたから、ややこしくなってきたわけです。由布院の拠って立つ魅力に関係なしに、タコ焼き屋ができたり、オルゴールができたり、テディベアができたり。とにかく人が来るということで金儲けてやろうというヤツが沢山出てきた。何で大阪本場のタコ焼きを売らなきゃいけないのか。変ですね。結果、そういうものを買うような観光客が沢山来るようにもなっている。他の業者がいっぱい入って来ているから、コミュニティ、地縁も崩れている。

逆に地縁だけでは厳しい、という例を妻籠に見ることができる。妻籠・馬籠（いずれも昔の中山道の宿場町で全国でいち早く地域を挙げた景観保全活動により古い町並みが残されている）は「売らない、貸さない、壊さない」という三ない運動で成功した。これは地縁を守るということですね。しかし二世三世の考え方が変わってきた。それだけで喰えなくなってきた。単なる昔の街並みの保存だけで良いのか。次の段階をどうするか。この方向性を出せるかどうかです。

(4) 中国・貴州省調査に関する考察・検討・議論のまとめ

1) 民族観光地の様々な種類と差異

- ・ 貴州省内の観光地は、同じ民族観光をテーマにしても、さまざまなタイプと性質があった。省政府が直接開発した紅楓湖民族旅游村のようなテーマパークと、既存の村をベースに観光提供する生態博物館や民族観光村とでは、資源の提供の仕方をはじめ多くの点で異なっているのは明らかだが、後者の間でも、以下のようなさまざまな違いがあった。

<景観>

- ・ 観光地化されていない幹線道路沿いの町や村では近代化が進み、コンクリート造りの家も目立っており、我々が訪れた民族観光村でも、都市近郊や幹線沿いに位置するところでは、同様に殺風景な場所もあった。
- ・ しかし、多くの民族観光村では山間部で近代化が遅れていることや、景観面への配慮を行っていることもあり、木造の伝統的な家並みが保全されており、一部コンクリート造りの家には木の板で覆うなどの処置を施す村もあった。
- ・ ただし、整備が行き過ぎて、木造でありながらも新しい家並みが目立ったり、村の規模に比べて豪華とも思える広場が整備されていたりするような村も見られた（南花村）。



南花村の観光用広場

<設備>

- ・ アクセス道路、駐車場、広場、散策路、トイレなどの各種設備の整備の度合いや規模も、相違があった。これは観光開発の出資者が誰であるかとも大きく関係しているようである。

<ホスピタリティ>

- ・ 民族観光村には、観光客が来ることがあらかじめ連絡され、村民総出で歓迎儀式を行う村もあれば、観光客が来てもほとんど対応しない村もあるというように、観光客を迎える体制にも大きな違いがある。また、村民の観光客に対する態度にも大きな違いがあり、村民全員で歓迎の笑顔を表してくれる場所もあれば、観光客に対して無関心なところもあり、モノを売ることを優先した“観光ずれ”が感じられる場合もあった。

<出資者・組織形態>

- ・ 村の観光開発にあたっては、省政府などからの補助金をベースにし、その後、村自身も設備整備の資金を負担するケースが多いと思われるが、老漢族の村・天龍屯堡古鎮では、都市で成功した村の出身者が、村に会社組織をつくって、そこに投資するという形態をとっていた。トン族の村・肇興では、省都の貴陽に住む漢族の企業家が村に会社組織をつくって経営している。生態博物館となっている鎮山村では、現在、香港の企業による投資の計画が進んでいる。



天龍屯堡古鎮の観光投資会社

<民族観光地の差異と観光地のライフサイクル>

- ・ このような民族観光地の間での差異は、村に残る伝統文化などの観光資源、地理的位置、最後に挙げた出資者と村との関係なども関係してくると思われるが、観光客を迎え入れてから経過した時間にも関係してくるのではないかと考えられる。
- ・ 例えば、観光開発を始めて10年以上経つような村では、外国人が来ることに對する新鮮さも失い、観光客へのもてなしがルーチン化し、ホスピタリティも低下しているケースが見られたが、観光客を受け入れ始めてまだ2年ほどしか経っていない季刀村では、元々ミャオ族が持っていた旅人をもてなす精神が損なわれておらず、村民総出で笑顔で挨拶をして歓迎してくれる態度が見られた。
- ・ 景観面や設備面では、開発開始から間もない場合は、十分でない場合もあるが、逆に南花村に見られるように過剰な整備が行われている場合もある。
- ・ 一方で必ずしも開発からの時間の経過がマイナスに働くだけでなく、肇興村に見られるように開発から時間が経ち、外部の文化面とマーケティング面でセンスがある投資家が入ってくることによって、歌や舞踊などの民族文化がより洗練させた形で提供されるようになるということもある。
- ・ 以上のように、観光開発からの時間の経過とともに、観光地の様態が様々な面で変化していくことが推定され、その“観光地のライフサイクル”のどの段階にあるかという切り口で、貴州省の民族観光地を分析・評価することができるのではないかとこの視点が石森教授から提案された。

2) 貴州省の民族観光の成功要因

- ・ 世界各地の観光地、特に文化を主な資源とする観光地では、一般的に見て、観光開発から年月が経つにしたがって、初期のホスピタリティが薄れ、明らかな商売目当

での業者や住民が増え、宿泊、物販、飲食施設等の乱立や看板の氾濫などにより景観が荒廃するケースが多い。

- ・ また、当の文化資源についても、民俗芸能から宗教色や伝統色が薄れ、観光向けに俗化が著しいものになってしまうという所謂“観光ズレ”と称されるものが現れてくる。
- ・ 貴州省でも、その傾向が現れ始めていることは否定できないが、その一方で、郎徳上寨など一部の民族観光村では、開発から約 20 年が経つにも関わらず、その“観光ズレ”現象を大きく抑えることに成功し、魅力の減退を防いでいると感じられた。

●コミュニティの自律性

- ・ こうした貴州省の民族観光の成功のベースは、“コミュニティの自律性”であると考えられる。
- ・ 最も優れた成功例と言える郎徳上寨村をはじめ成功している観光地は、最初のきっかけこそ地方政府など、外部からの働きかけだったかもしれない。しかし、その後は政府の力は借りるものの、上から押し付けられたプロジェクトや計画をただ実施したというわけではなく、ほとんどの村民が参加する形で、村自体が方向性を決めて一つにまとまり、創意工夫を図り、さまざまな困難を乗り越え、自発的に努力を続けるといったことで、今日の成功を導いてきた。
- ・ 貴州省では、最初に民族観光に取り組もうとした際に、7つの村を「民族風情旅游点」として定め、支援やアドバイスをを行ったが、7つの村すべてがその後、成功したわけではなく、自発性や自律性に欠けた村々ではその後、観光開発が続いていないことから考えても、このコミュニティの自律性が重要な成功のベースにあると思われる。
- ・ さらにこのコミュニティの自律性を支えながら貴州省の民族観光を成功に導いた要因を分析し、大きく以下の5つが仮説として考えられた。

①観光収入の公平な再配分制度

- ・ まず郎徳上寨で注目されたのは、観光収入の分配が不満を生まないように、公平・公正に配分される仕組みができていたことであった。
- ・ 村に観光客が訪れると、男は蘆笙を吹き、女は歌を唄い、水牛の角の杯で酒を勧める村入りの儀式を行う。そして、儀式後に広場で多彩な歌と踊りを披露する。村は一括して歓迎儀式上演料として観光客から1グループあたり500元を徴収する。そして、この一連の観光の仕事に参加した村民は、民族衣装着用、盛装着用、踊り参加、蘆笙演奏、歌唱などといった役割ごとに、三角、四角、丸などの形の点数が書かれた板が渡される。そして、1ヶ月ごとに、観光総収入から蘆笙の修繕費や管理

費などを村の経費として 10~20%差し引いた後、各人の累積点数に応じて現金を分配する仕組みである。

- ・ これは、かつての人民公社時代の仕組み「工分（コンフン）制度」を活かしたものである。郎徳上寨の観光開発を始めた当時、現場で指揮をした村の元共産党書記陳正涛氏も、村民全員参加の原則と工分制度により、村民の間での収入の分け方が公平であったことが、大きな成功要因だったと振り返っている。
- ・ 観光地が発展すると、観光収入を得られる者とそうでない者、あるいは観光収入の不平等な分配などが、コミュニティに亀裂をもたらし、ひいては観光地の魅力を減退させる大きな要因となる場合があるが、郎徳上寨では工分制度により、それをうまく回避していると言える。
- ・ 一方で、公平なだけでは参加者の努力や創意工夫の意欲が衰えていく可能性があるが、郎徳上寨村では、土産物などの販売収入は各自の収入になるという仕組みも同時に採用して、工分制度との二重構造になっており、個人が伸びる余地と全体での公平性の両方を確保している。
- ・ この工分制度は、中国の共産主義に由来するものではあるが、本来、農業や工業に適用されていたものを、観光業にアレンジして適用したという点で地域独自のものであると考えられる。工分制度そのものではなく、観光収入の公平な配分を図る仕組みを地域の実情に合わせて工夫して、つくり上げた点は、他の国や地域でも学ぶべき点と考えられる。

② 専業でなく兼業の観光地

- ・ 郎徳上寨や肇興など成功している観光地では、観光を専業とするのではなく、他に農業や手工業などの産業と兼業で行って、主産業と観光業を両立させていることが、成功要因の一つではないかという仮説が提案された。つまりは「観光で稼ぎたかったら“観光立村”と言うな」という逆説である。
- ・ 観光を専業とすれば、どうしても村の景観やビジネスの仕組みが観光客の興味や利便性に向けてつくられたものになる。しかし、旅慣れた旅行者にとって、それは逆に“観光ズレ”した地域に映り、魅力を大きく減退させるものになってしまう。今回の視察対象地での極端な例としては、紅楓湖民族旅游村が該当し、人工的に造成された村でスタッフはすべて観光専属であった。
- ・ それに対して、ほとんどの村では、観光収入を大きく増やしたとは言え、未だ農業が産業の中心であり、最も成功した郎徳上寨でも収入の半分は農業収入となっている。そのため、生活時間のすべてを観光に割いているわけではなく、観光客への接待と民俗芸能の披露は 1 日 2 回各 1 時間半に限定し、早朝などその他の時間は農業に従事している。これにより「何が何でも観光客から金を得よう」という態度は防ぐことができ、周囲ののどかな田園風景も維持されていくことになる。

- ・ また村全体としてだけでなく、個人ごとに見ても観光専門者はいないことになる。これは観光事業者と非観光事業者の間の溝をつくらずにすむことにもなる。これは、①で挙げた観光収入の公平な再分配制度が整っていることと併せて、コミュニティ内部での対立を避け、村全体、村民全員で観光客を歓迎する雰囲気づくりにも資することになる。

③地域資源保護に対する現実的だが、ぶれない哲学の存在

- ・ 前述のように貴州省文化庁文物処処長という文化財保護の立場にいた呉正光氏は、民族文化の消滅の危機を強く感じたがゆえに、村を閉ざして保護を図ることは得策ではなく、積極的に観光開放して民族間の相互理解を促し、民族文化の地位向上を図ることが重要と考えた。
- ・ その考え方を「開放型保護」と呼び、「死んだ保護はいらない」と言って、生きた人間が伴う文化の持続を第一に考えている。
- ・ 呉正光氏は、そのため、「絶対に守るべきもの」と「生きた人間が関わる限り時代の流れとともに変化しても仕方がないもの」とを区別して考えている。前者には、服装、環境、建築を挙げている。建築内部の生活空間をはじめ、その他のものは後者に入る。これは一見、乱暴なようだが、放って置けば近代化や漢民族化の流れに飲まれて、民族文化すべてを失ってしまう状況の中で、持続的に守りやすい現実的な防衛ラインであり、民族文化を最大限残す最適解である可能性もある。
- ・ また、一見緩そうに見える考え方ではあるが、その絶対的な防衛ラインは明確であり、地域資源保護が形骸化することも防いでいる。実際、郎徳上寨で現代的なデザインによる宿泊施設とそこに至る風雨橋の建設を州政府が始めた際には、呉正光氏ら省政府がそれに反対し、工事中止と宿泊施設計画の白紙撤回をさせている。
- ・ 一方、伝統文化の変化に対する柔軟な姿勢により、新たな文化の創造が見られる例としては、前述の「反排木鼓舞」のほか、我々の視察でも、青曼村では、新しく創造されたツバメの踊り、肇興村では、周辺地域の埋もれていた伝統歌謡を掘り起こし訓練してショーに取り入れるといった事例を見ることができた。



棚田に囲まれた郎徳上寨村の風景

④コミュニティの優れたリーダーの存在

- ・ ③に挙げた「文化保護に対する優れた哲学」が地方政府側にあっても、コミュニティの側でそれを受け止め、理解し、コミュニティを率いる優れたリーダーと、それを実践していける組織が

なければ、実現できない。そうした点で、貴州省各地の成功した観光地は、優れたリーダーと組織体制を持っているものと感じられた。

- ・ 郎徳上寨では、村の政治的トップである共産党書記・陳正涛氏と、シャーマンである鬼師・陳玉輝氏の2人の協力と役割分担によるリーダーシップが、村の成功の大きな要因として挙げられている。共産党書記である陳正涛氏は、省政府の呉正光氏の働きかけとその背後にある考え方や経済的メリットをよく理解して村の観光開放を決断し、シャーマンであり村の精神的なリーダーである陳玉輝氏が、当時ほとんど反対していた村人を説得するという役割を果たしている。
- ・ 共産党支配という“タテマエ”の権力構造の中では、人々は動いたとしても形式的なものに終わってしまう可能性があるが、シャーマンという村の精神的リーダーが働きかけることで、“ホンネ”部分から人々を動かすことができたと考えられる。郎徳上寨では、そうした権力の二重構造のホンネとタテマエが上手く重なるようにそれぞれのリーダーが協調し、村をうまく動かしたことも大きな成功要因と考えられる。

⑤パイプ役の存在（政府と住民、内と外）

- ・ 観光開発をリードする政府側に優れた哲学があり、地域側にも優れたコミュニティ組織があったとしても、両者を繋ぐパイプが存在しなければ、両者は結びつかなかったと考えられる。
- ・ 貴州省文化庁文物処処長・呉正光氏と貴州省黔东南苗族侗族自治州副州長・呉徳海氏の2人は、地方政府の要職に就くエリートである一方、少数民族ミャオ族出身として、少数民族住民の代弁者という立場にもあり、中央政府～地方政府～地域住民の間を繋ぐパイプ役として大きな役割を果たしたと言える。
- ・ 特に呉正光氏は、北京で貴州省のトン族の建築文化を紹介する展示イベントを開催したのを皮切りに、貴州省の少数民族文化を積極的に中央政府にアピールする役割を果たす一方、それまで閉鎖的な環境にあった省内の村々を、観光振興に向けて口説いて廻るといふ上下両方向への働きかけに積極的な役割を果たしている。
- ・ また、近年、老漢族の村・天龍屯頭古鎮やトン族の村・肇興村では、地域の文化を理解する村出身の成功者や省内の大学教授が投資家となって観光開発で主導的な役割を果たしている。この場合も、投資家は村の文化や事情を理解しつつ、外の事情や経営面にも明るく、内と外とを繋ぐ重要なパイプ役となっていると考えられる。

3) 貴州省の民族観光および研究の課題

- ・ 貴州省の民族観光は必ずしも成功例ばかりではなく、また成功した観光地でも、今後の課題を垣間見ることができた。また、今回のように約10日間で貴州省各地を巡る短い視察旅行の中では、調査自体に大きな限界もあり、調査結果を踏まえた上で見えてきた研究の課題もある。以下に、その主なものをまとめた。

①コミュニティ・ベースド・ツーリズムの適切なスケール

- ・ 今回の視察で概ね成功していると考えられる観光地の人口規模を見ると、概ね 100 戸 500 人前後というところが多かった。
- ・ これに対して、千戸以上の伝統家屋からなる西江鎮は、見るだけの観光地となっている印象であり、コミュニティが観光にうまく関わっているようには見受けられなかった。
- ・ 前節で貴州省の民族観光の成功要因を分析したが、成功の要因としても一つ、この集落規模というものが関係しているとする、この 500 人規模より大幅に大きいコミュニティ単位や、逆に数十人規模のコミュニティでは、観光にうまく関わる事が難しい可能性がある。
- ・ 500 人という規模は、コミュニティ全員が互いによく知り合う仲である上限の規模とも推定され、一つのまとまりとして動ける最大限の大きさであるのかもしれない。これより小さければ、まとまった力を発揮しにくい。逆にこれより大きいと、一つにまとめるのが難しく、個人のコミュニティ全体に対する責任感や義務感が薄れてしまうということもある。
- ・ このコミュニティの規模と観光事業の関係は、今後、検証が待たれる研究課題の一つと言える。

②旅行者規模の増大への対応

- ・ 貴州省は、中国の内陸部にあつて産業化、近代化の波に出遅れ、経済的な発展も遅れた。また、少数民族観光では雲南省が先にメッカとして発展し、それと比較して貴州省には少数の旅行者しか来訪しなかったことが、逆に伝統文化を良く保持し、資源としての大きな魅力を保ち得ることにもつながった。
- ・ しかし、最近は国内外の注目を集めるようになり、特にこの数年は飛躍的に観光客が増えている。前述のように、これまでは 100 戸 500 人規模の村が、ほどよい程度の数の観光客に対応していたため、一定の村の秩序やホスピタリティなどを保ち得ていたとも考えられる。
- ・ 郎徳上寨では、1日2回しか観光客へ対応しないというスタンスを今後も変えないという発言が村関係者から聞かれたが、それでも、今後、さらに観光客が小さな村に押し寄せ自由に入って来るようになったり、周囲の村がマス・ツーリズムに対応して“老舗”の自分たちよりも多く稼ぐようになったりしたときに、ビジネスチャンス



多くの国内観光客が押し寄せる黄果樹瀑布

を逃すまいという欲求に抗し切れるかどうかはわからない。

- ・ そうした間近に迫っていると考えられる危機的状況に対して、村や地方政府がどのような対応を見せるのか、あるいはどのように対応すべきなのか、ということは地域の課題であり、今後の研究課題でもある。

③外部資本の流入の影響

- ・ 郎徳上寨とは別の形の成功例と言える天龍屯堡古鎮や肇興村の観光開発の構造や組織形態については、ヒアリング結果以外に詳しい情報が少ないため、それ自体、今後の研究課題と言えるが、その両者に共通するのは、外部資本による開発が行われている点である。
- ・ ただし、天龍屯堡古鎮に投資しているのは、村出身の企業家であり、村の組織と緊密な連携を持って観光開発を進めている。一方、肇興村で投資しているのは、外部の漢民族ではあるが、貴陽在住の貴州省出身者であり、元大学教授としての教養もあり、開発にあたって民族文化や景観に十分な理解と配慮を持ち、かつ一定のセンスを持ち合わせていることが見受けられた。
- ・ しかし、前述のようにこの数年、飛躍的に観光客が増えた貴州省は、多くのビジネスチャンスがあると見られており、今後は省内に限らず、省外、国外からの投資が大幅に増加すると考えられる。
- ・ そうした場合、民族文化の保護と観光開発を両立させるべく、どのように制限、規制、誘導して、コントロールするのが、地域と研究、双方の課題である。

④文化の変化の許容範囲

- ・ 前述のように貴州省文化庁文物処処長・呉正光氏は、資源保護に関して、絶対に守るべきものと、時代の流れとともに変化しても仕方がないものとを区別して考えていたが、一般的にはそのラインは曖昧である。
- ・ 観光化が進んでくると、観光客が喜ぶと考えて、見栄えが良くショーアップしやすいものを求めて、隣の地域の文化やデザインなどを借用したり、自文化と融合させたりといったことが世界中で見られる。多くの場合、観光客側は、多少の地域的差異は区別ができず、むしろより強調された地域性を印象付けられることになる。
- ・ こうした現象は、文化の真正性や民族著作権の問題としてマイナス面と考えられることも多いが、その一方で、



漢族資本によるホテル肇興賓館

ドイツ人により伝統儀式などをアレンジして考案されたケチャック・ダンスがバリ島の新たな文化として定着したように、新たな文化創造として大きな意義を持つことがある。

- ・ 貴州省でも、反排村の伝統的な踊りを、ショーアップを意識しながら力強くアレンジした「反排木鼓舞」が考案され、他地域にも伝えられる過程で、少数民族の各村の若い世代が伝統的な踊りを積極的に習ったり、切磋琢磨して技を磨いたりといった伝統継承の一つの力になっている。
- ・ また肇興村では、周辺地域の歌や踊りを集めて、若い世代が覚え、訓練されることによって、歌や踊りの質が向上するとともに、観光化されなければ忘れ去られかもしれない伝統文化が、若い世代に継承されていくという効果も見られている。
- ・ しかしながら、文化の変化の許容範囲のラインが不明確であれば、何でもありの状態に陥るのは時間の問題であり、俗化したり地域性が希薄化したりするなどして、地域の資源価値そのものを失うことになってしまう。
- ・ それを防ぐためには、伝統的なものを「型」としてきちんと保存・継承した上で、時代や生活スタイルの変化に合わせた新しいものを創造するという役割分担を、明確にすることが考えられる。また、新しく創造したもので稼いだ利益の一部は、古い型の保存・伝承に回すという仕組みが望まれる。
- ・ さらに、新しく創造したものであっても、そこから伝統的な型がどうであり、それをどうアレンジしたのかということ、文化を継承する者がきちんと説明できるということが、変化の許容範囲のボーダーラインの一つとして考えられる。
- ・ こうした方法以外にも、文化の変化の許容範囲を考える手段もいくつかあると思われる。今後の大きな研究課題の一つと言える。

⑤ 旅行社・ガイド側、旅行者側の教養・マナー啓発

- ・ 観光地の劣化を招いた責任は、必ずしもすべて観光地側にあるわけではない。旅行者の地域文化を尊重しない態度やマナーは、観光地側や地域住民側に反発や悪影響を与え、ホスピタリティの悪化や商業主義、拝金主義の蔓延にも繋がる。
- ・ また、旅行者を現地に連れてくる旅行社やガイドの側にも、旅行者に必要なマナーや民族文化に関する知識を啓蒙する役割が求められる。
- ・ しかし、実態としては、旅行社やガイドは外部の人間であることがほとんどで、民族観光の対象となる場所の住民である少数民族を一段低く見る傾向があり、その民族文化を尊重したり、マナーを教えたりするどころか、自分たち自身が観光地の住民や文化を馬鹿にした態度を取ることもある。
- ・ もともと貴州省の民族観光振興は、民族文化を、誇りを持って守ることを目的としたものであり、これでは本末転倒になりかねない。旅行者側の教育は日本でも難しい問題ではあるが、貴州省の民族観光の今後の大きな課題の一つと言える。

⑥地域側の観光受け入れのための啓発・教育

- ・観光客を受け入れた当初は、地域住民が熱烈なホスピタリティを示した村も、その後、観光客の来訪が恒常化して慣れが生じてくると、来訪客に対する新鮮な感覚や歓待の熱が冷めてくる。それによって、ホスピタリティやサービスの質が低下してくることを避けることは難しい。
- ・郎徳上寨村でも、観光客への村の開放から約 20 年が過ぎ、物心ついたときには観光客を目にしていた世代も成長して、村の観光の主役となるような時期に来ている。また、観光客側の性格も変わり、素朴さを求め、素朴さを失っていなければサービスの質には目をつぶるようなタイプの客から、ある程度のサービス水準を要求するタイプの客へと変化し始めている。
- ・そうした状況にある場合は特に、受け入れ側では今一度、観光の意義を確認し、観光客との付き合い方や接し方、マナーやルールを確立したり、地域独自の魅力や誇りとは何かを再確認したりするなどして、地域のホスピタリティやサービスの質の維持・向上を図る必要がある。
- ・また、地域資源の価値を失わず、旅行会社等の外部資本にも頼らずに、自律的な観光を持続していくためには、観光客を受け入れる様々な具体的なノウハウを地域側で身につけることが望ましく、特に自分たちの地域を地域住民自身がガイドし解説することで、真に地域の魅力を観光客に伝えることができる。
- ・そのためには、地域住民に対する啓発・教育活動が必要であり、観光には直接関係しない一般住民や子供も含めて、すべての住民が観光の意義を理解し、観光客をもてなす雰囲気を醸成して、ホスピタリティを維持するとともに、外部ではなく住民の中からガイドを養成したり、ツアー・オペレーター組織を立ち上げたりすることが望まれる。